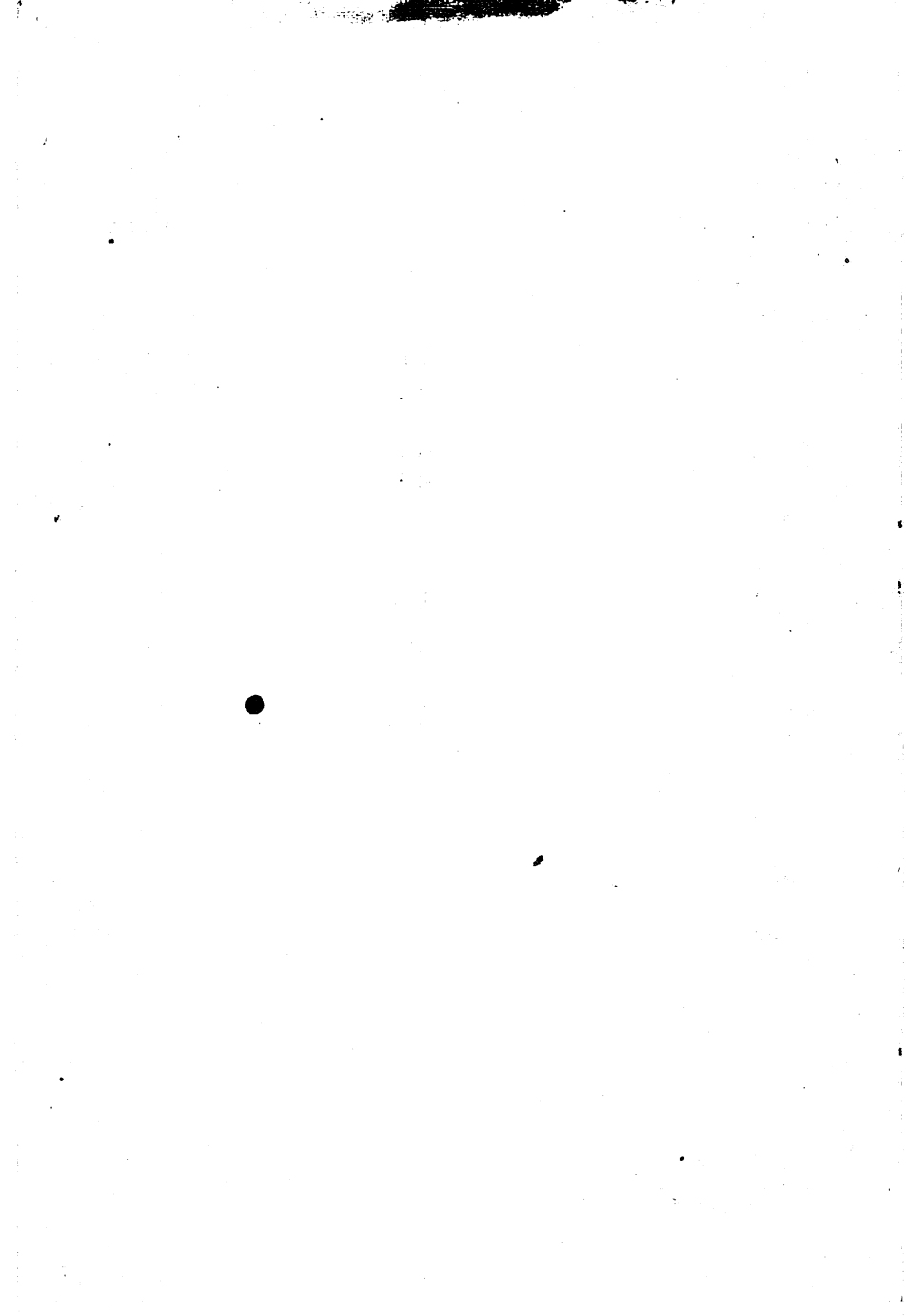


攝津國長柄人柱



攝津國長柄人柱

作者 並木宗助
安田蛙文

序詞浩々たる萬古備に甄さずと雖も。周處は長橋の害を救ひ。橘姫は王船の難に代る。御枝川の形代郡里の河の婦人。日本唐土異れども是皆河伯の心となす。滄海原の浦安く傳へ治めて三十五代。豐財の姫帝皇極天皇と申し奉るは。萬乘の坤位を踐み。和らぐ國の岡本や。飛鳥の里の宮所。オロシ尊き聖化ぞ盛んなる。地色玉にも勝る御粧ひ。寶祚二八に渡らせ給へば。一人の師範たる藤原の鎌足公。同じく政務に年を経し蘇我の蝦夷大臣。胸に包みし惡心は誰か白髪を引入れて。冠正しく着座する。御階の下には鎌足の老臣。山上の次官有風。此方は蝦夷が雜掌縣の押照。御殿に月卿雲客の騒き従ふ時津風。鳴らせる枝は荒海の。フシ障子の。波も靜かなる。地色天皇御辭麗しく。詞古へよりも代々の帝。都の土地を定め給はず。所々に遷さるゝは皇居に相應せざる故。今此飛鳥の宮所も。四方の間狭くして群臣諸卿も是を歎き。政に諫あり。王法の廢れる時は萬民の爲ならず。地それ故都に程近き三輪明神へ籠り参らせ。三七日の其間。都相應の地を祈り。神の慮に任せんと思ふは如何にと宣旨ある。詞鎌足紫の冠を傾け。勅諚の如く都の土地と申すは。青龍白虎朱雀玄武。四陣の勝地備はらざれば九條の廣路整はず。三七日の御參籠然るべしと勅答し。ナウ蝦夷公。女帝の觀慮を痛められ。地臣下萬民を御惠み有難く思さずやと。云へば蝦夷は打領き。詞下萬民を子の如く。御憐みの觀慮の程。折柄好ければ某も申し出す仔細あり。年罷り寄る此蝦夷が。悴入鹿は不行跡。

地色勿體なくも天皇に心を懸け奉り。詔書を差上げし由。聞くと等しく勘當し。詞今は何處に居るとも知らず。大臣職の跡目無く。政道の家絶ゆれば自然と君の爲ならず。つくぐ思案を運らすに。悴入鹿も艱難し先非を悔いて歸るは治定。さるに依つて御邊の娘藤照姫を某が貰ひたし。彼と夫婦になすならば。自ら天皇へ戀慕の心も思ひ切り。地色大臣職も斷絶せず。兩人一家と成るならば猶政道を熟談し。天下の爲君の爲。是非藤照を賜れと。己が惡事に引入れるお爲ごかしに云懸けられ。例に變らぬ我儘と鎌足公は山上と。顔見合せて笏取直し。詞娘藤照所望の儀祝着に思へども先達て御邊の甥。石川三位光成と許嫁せし上は。はや某が儘ならずと。地仰せも果てぬにイヤ／＼それは内證の詮議。詞縁組といふものは。凡そ六ツの禮あつて。表立たねば成らぬ事。御前に於て申し出すは國家の爲の表向。光成は我甥なれども。伯父さへ知らぬ口約束。御邊の儘に成らぬとは。フウ扱は蝦夷を嫌ふのか。地一家に成るが厭ならば光成とも縁組無用。サア返答はとせりかゝる。鎌足騒ぎ給はぬを。山上次官堪へかね。詞コレ蝦夷公。主君斷り申さるゝに。無體に望みの御詞。一物もあるやうに。何とやら人聞き悪し。我も人も年寄はもたへがなくて腹が立つ。胸を鎮めて御思案あれと。云はせも立てず縣の押照。ヤア慮外なり山上。主人と主人の御前沙汰。老耄の差出て。無體の望み人聞きが悪いとは。今一言吐出さば。地瘦首を打落すと。反打ちかゝれば。から／＼と笑ひ。詞主人の無體を意見もせず笑止さに諫める某。老耄といふ詞は。汝が主人の蝦夷へ差合。年寄つたれども山上次官。其刀一寸にても拔放たば。地腕切折らんと立ちかゝる。イヤ緩急と雙方が。寄らんとするを御簾より。待てと遙かの綸言に。フシ恐入つてぞ畏まる。地色帝は鎌足蝦夷を召され。詞藤照姫縁組のある上は。假令鎌足承引するとも。聲光成が得心せじ。然れば數多の挑みとなる。蝦夷は入鹿が道ならぬさがしき心をやめ歸らば。公卿の内の娘を娶り。大臣の家を繼すべし。鎌足は藤照を光成に添はされよ。かく自らが云ふからは。兩方仲良くし給へと。地物美しき御捌。蝦夷主従苦い顔。鎌足次官は有難く時の面目悦ぶ所に。詞三輪明神の神職。高木大之進慌忙しく參内し。昨夜明神の御山

へ。車輪の如き星落ちて。神木の杉八本づきと折れて震動す。餘り不思議に候まゝ。奏聞のため參内。地上の御沙汰もあるべければ。吉凶は申さずと色を違へて言上す。地色鎌足暫し御思案あり驚き給ふ御氣色。詞是客星とて天上に常に無く。帝位を望む者ある時。現れ出づる惡星。杉八本の折れたるは。坤の卦の數女帝の位。直なる御代に災をなす前表。地御憤みあるべしと。奏し給へば帝を始め。月卿雲客山上もフシハツと驚くばかりなり。地色蝦夷は胸に應ゆれど。些とも怯まず冷笑ひ。詞ことゝしや鎌足。三輪の山に星降りしは。天皇都を他に遷す勅願ある故。三輪明神へ行幸と。天帝是を告ぐるのみ。草木に心無し。星に限らず。雷にも折れ風にも折れる。數を以て理を盡さば。木の事は扱措いて鋸屑もいへば云ふ。地蝦夷が申すが誤りならばヤア大之進。汝吉凶包まず申せ。違ひはせまいと問懸けられ。詞御意の通り蝦夷公鎌足公。御推量の一方が。天文に合ひ候と。地寄らず障らぬ詞の末。詞イヤサまだるい返答。孰れなりとも慥かに云へ。しかし其方が娘櫻井は。次官が伴源内が妻と聞く。縁者の主の因縁を思ひ。鎌足が肩持たば汝が蟲眉の沙汰となる。眞實な某が。詞に附かば是順道。地サアくどうぢやと退引させず。後に押照きめ廻せば。次官も眼に角を立て。詞粗忽を云はゞ大之進。一家とは云はせぬと。地詰寄せられて迷惑顔。詞拙者は此事奏聞ばかり。吉凶は申さぬと始めより申譯。地はやお暇と占の。フシ逸散にこそ立歸る。地色天皇左右を押鎮め。都遷しの願といひ斯かる不思議のある上は。愈々三輪に行幸して三七日籠るべし。鎌足蝦夷に政。宜しく任すと云の葉も。纖弱なりし女帝。御帳臺へと立ち給へば。四人の主從善惡に。別れ開くる。大八洲。搖がぬ國と。三重仰ぐなるフシ春霞。飄々雲の上人も。心賑ふ彌生頃。三輪明神へ御幸とて。供奉の官人先拂ふ。中にも三位光成卿。非常を糺す磐固の司。御車よりも二三町みそ川土橋物隠れ。女見る目は格別に戀と情と淫と。三ツを合せて光成と。スエテ人も面を見知るらん。フシ續いて是も色含む。地色二八の眉のかほよ花。鎌足公の一人姫藤照姫と名付けしは。君に巻かれて寢て見たき花の姿に引添うて。山上次官が末子八王。主と家來の不相應。龍田の山の紅葉と。三笠の山

の毬栗を。フシ並べて見るが如くなり。地色我より先の人止めんこれよ申しと呼懸けて。立寄る中に振返る。今見た顔で光成卿。詞是はく鎌足公の息女。定めて父御の御名代。近頃御苦勞千萬と。地色云ひさし歩む袂を控へ。御苦勞とはお前の事。今日の行幸を幸ひに。ちつと云ふ事怨みる事。覺書して参りしと。手を執り給へばア、コレノ。詞爰は人中。あれ。八王も彼方向く。地面目無し恥しと。振切り給へば大事ないく。詞幼きより許嫁。地天下暗れての夫婦仲。其の祝言は何時の事。二月延び三月延び。半季一年便々琴の糸ほど延びたがる。伯父御蝦夷様が不得心。イヤ從弟の入鹿が勘當故。今は成らぬのまあ待てのと。地延びるは一物。さあお迎は何時の日ぞ。それ聞きたいと執着いて。人目構はぬ催促は。フシ傍で聞くさへ身を冷す。地色光成ほうと持ちあぐみ。斯くあらうと存じわざと見ぬ振。幸ひ帝三七日の御逗留。其間に緩りつと。申譯には怎うく。と。囁き黙頭く互の心。解け合ひたる折柄に。はや御車の牛の足。次第に近づく五井やせりつみにこそ藏けり。フシ然る所へ。地色編笠眉深に傾けたる大男子。訴訟の者と云捨に隨兵警固押分けく。御車近く立寄れば八王つくと轅を圍ひ。詞ヤア何有なれば。一天の君をも憚らず。緩怠なるしれ者。罷退れときめ付くる。何サ。おのれ如きの匹夫下郎は。相手に取らぬと見向きもせず。地懷中より認め持つたる一通を。御簾の内へ投込めば八王苛つて。詞ヤア訴狀ならば取次を以て。觀覽に供へる筈。己れが慮外を顧ず。下郎呼ばはり何奴なるぞ。笠を取つて面突出せ。但し此方から手を懸けうかと怒れども。ヘテ扱て要らざる世話。笠も禮儀もおのれには習はぬと。地惡口たらく。フシ詞募れば。地色光成も立寄つて。御前なるは雙方共に。鎮まれく。と制せらる。彼男子編笠取つて。詞なう久しや光成と。地云ふを見れば蘇我の入鹿。詞是はく珍しの對面。君の違勅父の勸氣。從弟づからの某何ぼう氣の毒に思ひしが。只今の一通とは心得難し。道を立てくの願ひならば。一家の好みに某取次。若し理不盡に及びなば。直に武官に引渡さん。返答如何にとありければ。ホ、ウ至極の察賞さこそく。我如何なる業報にや。帝をちらと拜せしより。勿體なくも戀ひ奉り。龜書を差上げしより。父が

見限り勘當し。方々と鹽をふみ。其鹽がきれめ／＼に浸渡り。君の御事ふつゝりと思ひ切り。暗夜の明けたる如くに
て本心に立歸り。地色今の悔みを推量あれ。只今車へ投込みしは先非を悔いたる一書なり。取次を頼まんにもかく零
落れし某を。見やる者も無き故に此仕合。御機嫌を伺ひ一家の情に。宜敷執成頼み入ると。さすがの入鹿も扶持に離
れし唐犬の。フシ悄れ果てたる如くなり。地色や／＼あつて御簾の内より。光成。光成と召さるれば。はつと答へて伺
候ある。調入鹿が願ひ誠に不便の有様。誤り狀とあるからは料を赦し得さすべし。汝一家の事なれば。父が方へ同道
し。地其方宜しく差計ひ。不興をも赦さすべし。調又此一書は。鎌足方へ封の儘遣はすべしと。御暇賜れば。光成入
鹿を伴ひて。フシ蝦夷館へ急ぎ行く。地色八王丸聲を上げ。調ヤア／＼牛飼舎人。よしなき事に御遊の妨げ。御車急
げと下知すれば。隨兵女中ざゝめいて。廻る兩輪は三輪の山。鹿の呼ぶ聲鳥の聲つれて。山路に三重行幸ある。地色萬
乗の位を望む者は千乗の家より起るとかや。蘇我の蝦夷大臣。面に忠義を見せ懸けて心にこもる逆心の。胸に釘さす
障子さす一間の内に取籠り。天の時と地の理をばフシ考へ見るぞ不敵なる。地色家來坂熊九郎遠路の使。甲斐なくも
立歸り。かくと報せば蝦夷立出て。調ヤレ／＼九郎戻つたか。在所は知れたか何と／＼。さん候御子息入鹿公の御行
方。當國は申すに及ばず。近國残らず相尋ね。津の國長柄と申す在所にて。様子を尋ね候へば。十日餘り彼の地に滞
留。それより行方知れずと申す。先づ御健勝の段御報せ申さん爲。立歸り候と申す。オ、太歳々々。ハテ何處へか立
越えしぞ。地覺東なしと思案の體。坂熊九郎近く差寄り。調若殿入鹿公。御不行跡とて慙しめの御勘當。又御赦免あ
るに何の御遠慮。今我君の御威光を以て。國々へ廻文の遣はしお尋ねあらば。早速相知れ申すべし。此儀如何と伺へ
ば。蝦夷はほつと溜息つき。それ程の事汝に習はうか。悴入鹿を勘當は。皇極天皇へ無禁せし事を云立て。誠に内
心に一物あつて遂出す。今密かに行方尋ぬる仔細は。天皇の事思ひ切らせ。鎌足が娘を娶り入鹿に妻せ。一家となつ
て帝位を奪は。男は親聲は子。慾知らぬ者無きと心得。鎌足に娘を貰ひ懸けし所。はや先達つて某が甥。三位光成

と許嫁あると云ふ。所詮嫁入の乗物を入鹿に奪はせ。ほつかりと娘に疵付け。地是非に平にと叩付け。娘の縁を以て鎌足に抵抗させぬ思案。汝はより山城邊に立越え。詞何卒巡り逢ひ。入鹿と諸共爲果せと。地聞くより九郎慥かに受合ひ。畏つたと立つ所に石川三位光成卿。入鹿公を伴ひ御出てなりと注進す。人ごと言はばめしる鳥。諸羽もがれし入鹿が姿振。光成卿の跡に付き。フシみすばらしげに座に直る。地蝦夷は故と尻目で睨み。珍しや光成。詞不孝者めを同道し。何故に來られし。若し勘當の詫言なら。地無用々々と表面の應對。光成卿手を仕へ。詞今日三輪明神へ行幸の供先。押割りせり割り御子息入鹿。天子の御車へ一通を投込み。先非を悔いて勘當の願ひ。天皇御憐み深く。某一家の好みを以て。親子の和睦取りまかなへとの諭言。御了簡下されなば某も大慶と。地詞を添ふるは正眞の龍にあてがふ水海の。フシ渡りに舟ぞ是非もなき。地色蝦夷は時待つはや合點。詞左程懽應に叶ひし上。違背申すは上への恐れ。勅答宜しく。光成太儀。馬鹿者め。地性根直せと表面はきつくり心はほつくり。フシ折れくちも。フシよき老木なり。地色光成嬉しく早速の御得心忝し。詞コレ／＼入鹿殿。お年寄られた親父御孝行が肝要と。地氣を付けられてあい／＼と。誤り涙鬼みその。夕立空に雷光。フシ底氣味悪く見えにける。地色篤と合點の参りし上。御意見に及ばず。詞幸ひ某行幸のお供に外れ宿仕る。不日に又こそ参上。ヤ坂熊九郎。伯父君へ宜しく執成。地お暇申すと立出づる。蝦夷も見送り甥の殿。お世話過分と挨拶に。別れて出づる表口。入鹿は跡より手をつくね。忝しといふ身ぶり。お禮に及ばずさらばと。オクリ急ぎ我家へ歸りける。地色跡にはもち／＼うぢ／＼と九郎も氣の毒差當り。執成す詞も無き所に。蝦夷は思案の臍を堅め。詞コリヤ入鹿。爰へ／＼。つゝと寄れと。地呼付くる程氣味悪く尻込みするをはつたと睨付け。詞ヤイ狼狽者の大白痴め。天皇へ直奏とはまだ愛着の心離れぬな。父が性根は須彌山を庭に置き。西海を泉水と眺める工。纔な女一人に迷ひ。子孫永々の樂しみを知らず。おのれ勘當したはな。我れ萬乗の位を望めども。人間の天運知れず。萬一爲損せばおのれを残し。父が本望を遂げさせん爲。爲果せ一天下を手に握ら

ば。主ある女でも心の儘。足元の寶を知らず。隣の木まぶりを狙ふ鳥め。鳶が鷹の子は持たず。鷹が鳶の子を持つとは。地我身の事が殘念やと。子の鴈に經緒付けて。親が教へる驚掴み。フシ爪の長いぞ恐ろしき。地色入鹿は戀路と逆心と胸に合うたり叶うたり。詞誤つたりお氣遣ひあるな。假令天崩れ地が裂けても望み込まれし天子の位。地皇極さへ手に入らば何からでも望み次第。力は百萬氣は鐵石心に入らぬ月卿雲客。かたひしに擲裂き。追付け目出度き御即位と。惡に色増すしゆ天の相。親に似ぬ子を鬼子とは。フシ此時よりや傳へけん。地色斯かる所へ鎌足の執鞭山上次官有風。お使者とこたへ立出づる。此方も入鹿を傍に隠し。家來坂熊九郎出迎ひ。蝦夷も出逢ふ老人同士。わけて有風病後の歩艱。御免と斷り自由に坐し。詞主人鎌足申し越し候趣き。御子息入鹿卿の勘當。今日御赦免あるやなしや。御返答に依つて申し達する旨あり。有無の御返事承りたしとぞ相述べける。蝦夷默念として。はれ異な事を尋ぬる使者。上のお詞を添へられ。某得心の上。勘當を赦したがそれが何と。成程左様と察しての儀。勘當赦免あらば是打つて。お渡しあるべしと申したばかりでは合點參るまじ。今日行幸の御車へ。入鹿卿の投込まれし一通。帝勘當の願ひと思召し。光成卿にお詞を添へられ。此一通は封印の儘主人鎌足へお渡し。御子息の手跡見覚えあるべし。地色披見あれと投出す。ハテ氣遣はしと蝦夷公。披いて見れば口書の願ひはそこ。思ひよりべくが二ツも三ツもこりやとうちや。君が姿に絆されより。テモ野太い好色者。地不屈者とは思へども。使者の見る前差當り。返答すべき様も無く。スエテ差俯向いて在します。詞有風詞を和げ。親御の御身で當惑は御尤。是打てとは表向。御若氣故卒爾の一書。一天下の君に戀慕とは。帝位を亂す朝敵も同然。篤とお心直るまで御勘當が上分別と。主人も内意を申し越す。地天皇御觀覽なきを幸ひ。穩密に御計ひと。溫和やかに氣を付ける。地蝦夷の家來坂熊九郎。小差出てどつかと坐し。詞コレ鎌公の使者。戀は心の外とて。上下の隔て無きと聞く。天皇へ戀慕云懸け。御承引無くは無き儘。表向にもせよ是打てとは出過ぎたる計ひ。勘當も親心。赦さうが赦すまいが此方の氣儘。似合うた様に御殿の留守番ばかりを。

よく召されと立歸つてお云やれと。地無法無體を聞かぬ有風。推參なり若者。詞蝦夷公の御子息故是までも穩便。餘處外なら疾に斷罪。一度に懲りず二度三度。勘當とは主人の了簡。何を存じて出る儘の過言。地飛退れと睨付け。蝦夷公御返答。承らんと立直る。九郎堪らず立上り。詞ヤア要らぬ老耄の惡口。地命知らずと抜討に斬付くるを。四ぶんに開き重ねて来るを引撥し。取つて押へる老木の早業。詞なう烏濤がましき若武者。年寄つたれども昔作り。事は好まぬ立つて退けと。地引起しかつばと投退け素知らぬ顔。蝦夷公も氣の毒の兎角は倅が通り跡よりお返事申さんと。思慮を運らす底心。疑ひ懸れど根を押さぬ。智恵有風が分別も。歸り支度の折も折。逸り切つたる入鹿が勢ひ。走り懸つて有風が。首筋擱んで撞と打付け。しつかと押へて息の根止め。詞勘當の上塗親仁。古狐の骨頂。地冥途で化せと首振切り。門より外へ投出す。折節供の青侍待兼ねたる眞中へ。是はと驚く主の首。やれ殺したは。とフシわめき騒ぎ立て立歸る。地色蝦夷ははつと怪轉顔。しなしたり入鹿。詞此場を品好く歸し。油斷をさすが味方の勝利。早速家來が事知らさば。小事より大望の妨げ。地はて是非なやと跡の迷懷。入鹿ちつともたるます。詞廻り遠き御思案。日本國が攻來るとも。水の上の泡盛たつた一息。地氣遣ひあるなと思慮無き一言。詞いや。油斷大敵。彼めが倅に源内左衛門。八王丸とて兄弟の勇者。斯くと知らば押寄するは治定。こりや。坂熊。館の者ども殘らず召連れ逃歸りし家來に追着き。一人も殘らず召捕つて來れ。地急げ。と仰せに隨ひ。フシ我も。と驅出す。地色山上源内左衛門參内の道。家來が執する父が最期。聞くより直に草駄天走り。折節手の者三十騎。開きし門を幸ひに廣庭に取りかけ。詞ヤア。蝦夷公御親子。何科あつて我親有風を手に懸けしぞ。親の敵尋常の勝負。遁れぬ所と呼ばはつたり。地扱てこそ大事と蝦夷公。返答も無く身拵へ。入鹿縁先に進出で。詞ヤア小さかしきうづ蟲め等。親の敵とは共に冥途を望むのか。イデ一々に暇をくれん。地か。れや。と招くも強敵。寄手も鐵石。命惜まず切結ぶ。シヤ殊勝しやと天邊肩先。當れば梨子割か。れば胴切。勢ひ込んだる入鹿が勇猛。さしもの大勢引色逃

色。フシ何處までもと追驅行く。地潜つて驅込む源内左衛門。館の内には最前の。追手に懸り人も無く蝦夷一人。是ぞ好き敵参りぞふと切懸かる。蝦夷も遁れぬ太刀先双先。上段下段に受けつ流しつ。源内左衛門血氣の早業。踏込んで一刀切付けられし蝦夷は老武者。枝も堪らずのり返る。透さず取つて心元。刺通し親の敵を目の前に。討つた嬉しさ。討れた運命。フシ天の責とぞ見えにける。地色入鹿はかくと夢にも知らず。猶も進む軍勢を。難立てく切巻くるは。六天魔王の暴軍。三十人の寄手の者。一人も残さじと。八方無盡に難立てるは凄じかりける。三重へ次第なり。地色所の騒動隣郷より蝦夷有風討たれし事。報せの早打町々は。フシ上を下へとかへしける。地色源内左衛門立忍び入鹿を待てども深入か。隙取る内に蝦夷が首。太刀に貫き歸る道。氣を奪はんと突立て。又も様子を窺ひ居る。入鹿は残らず首並べ。引提げ歸る道の眞中。詞南無三寶親仁様。何時の間にこりやどうぢやと。地さすがの入鹿も胸ひいやり。仰天せしが扱てこそ。詞源内めが行方知れず。地何處までかは遁さんと。弱氣が結句婆羅門阿修羅。爰よ彼處と目懸ける所に。詞山上源内左衛門是にあり。親の敵は互の晴業。心を鎮めお出であれと。地悠々と呼ばはる聲。入鹿も首ども投捨て。地よくも待つたりさすがは山上。地いて來い勝負と鋒先揃へ。打てば飛越え。切れば開き勢ひかゝれば。此方へはづし。源内左衛門飛鳥のしれ者。入鹿は大剛狗賓の勢ひ。掴み裂かんと飛付けば。ひらりと躲してぐるりと落り。雞黃と矮雞の鳥合せ。一時ばかり戦ひしは。フシ目覺しかりける次第なり。地色中納言土師の連。勅書指上げ暫くと。呼ばはり。驅來り。刃を分ける天子の威光。兩人左右に引別れ。フシ互に汗を入れにける。地勅使は笏執直し。詞常行幸の御車。此四五町彼方に轟く。委細の様子觀聞に達し。私の宿意を以て。御遊を妨ぐる條不忠たるべし。有風討たるれば蝦夷も討たれ。雙方互角の其内に。蝦夷公は大臣職。高官と無官との依怙を以つて。入鹿には父の跡目。官祿も相違無く。帝の御階近く召されんとの儀。何れにても漢背あらば朝敵たるべし。綸言の趣き。フシ此通りと相述ぶる。地色源内元よりハツと平伏。入鹿は父の跡を繼ぎ。御階によらば我戀の。便り求むる

根心にて。奏聞宜しく違背なしと。勅答あれば勅使も悦び、フシ挨拶そこ／＼立歸る。地跡も別るゝ敵味方睨み。寄合ふ心の勝負。勅に免じて抜かぬは太刀先。詞抜いたら朝敵合點か／＼。おのれも合點か。赦して戻すは残念々々。此方も残念。おのれが首はおのれに預け。其方の首も其方に預け。地兩方四方勝負は後日。互の首が命の釣緒。體にしつかと括付け。五體を絡む藤原臣下。逃げず恐れず館に入鹿。詞其時見參。應扱て／＼。地後れは取らじと氣を張る。肩張る二人が勢ひ。地猛將勇士が心の争ひ。云はねど面は修羅天魔主。此方も愛染不動の猛火。燃立ち逆立ち。龍の怒りに虎の嘶き。突合せたる鱗と鱗魅入られて。左右へ別れける

第 二

地善惡二ツに分るゝは脊を合はして東西に歩むが如く。本は一ツの血の筋も心は遙かに行違ふ。入鹿大臣と從弟同士石川三位光成卿。天性柔和の生付直なる名にし大なむち。三輪行幸の御供の道よりお暇賜りて。知るよししたる山田の里、フシ御館にぞ休息ある。地色折柄入鹿の大臣が難掌縣の押照。上使なりと嵩高に門外よりも呼ばはれば。御上使とは如何ぞと石川三位光成卿。執權伴の主税之助。同じく跡に附添ひていざ先づ是へとありければ。詞勅使同然の押照。地座上へ參る御免なれと挨拶そこ／＼座を構へ。詞此度天皇三輪明神へ三七日の參籠は。飛鳥の都を他所へ選さんとの御願。昨日滿ずる曉に。津の國長柄に遷すべきよし神託に依り。先づ光成に土地見分の仰此山田の里の小地を替へて津の國半國先行はる。此旨主君入鹿の大臣お指圖に依つての勅諭。政繁ければ名代を以て申し達す。地有難く勅答あれと云ふに光成恭しく。詞勅諭の趣は身に取つて有難し。されども此事入鹿公の執成とは。生中好みある故に。地人の思ふ手前もありと。仰せも果てぬにいや／＼それは悪い御合點。詞我君は大殿蝦夷大臣の跡を繼ぎ。入鹿大臣と成り給へば天下の政務は我君次第。勸氣赦免の媒し給ふ光成卿へ。此役儀をとお取持。お受け無く

ては勅に背き。入鹿公も一分立たずなう主税殿。地如何思ひ召さるゝと詞の内より主君に差寄り。詞入鹿公は内證の事。勅説にて候へば違背は却つて恐れあり。地何か苦しう候べきと。主従目と目に心を合せ。勅説の御趣畏り奉ると。領掌あれば目出度し。詞入鹿公も悦び外に直談の事もあれど。それは追つての御沙汰ならん。地早く長柄へ越えらるべしと底には工ありながら。直に座を立つ青疊。フシ云残してぞ歸りける。地色主従跡を見送りて主税之助苦り顔。詞入鹿大臣勘氣を赦され半月も経つや經たず。押して勅説乞ひ奉るは心得ず。地一家の主人の前とも云はず押照が緩怠無禮。胸を撫つて控へしと拳を握ればいや／＼左にあらず。詞假令六位北面にても勅書を持てば大臣にも下馬をせず。彼が緩怠に見えたるは天子の威光と思へども。地いかにも外に仔細はあらんハレ訝かしと宣ふ内。主税之助表を見渡し。アレ又是へ女の使人に聞かせじ奥の間の。あまき襖を押明けて。オクリ密々へ語る其内に。フシそれと案内の。和らかに。地色入來る女は山上の源内左衛門が女房。名も櫻井のみづ／＼とフシ花の鏡や是ならん。地色奥より出づるは主税が女房。色も香もある梅苑が御取次と差向ひ。詞コレハ久しや櫻井様。テモ珍しや梅苑様。こな様もお變り無う。お前もお健康てお目出たやと。地にこゝ應待ひ又改め。お使の一通り承りたうござんする。詞さればとよ光成様と妾が姫君。藤照様とは許嫁。未だ祝言無けれども光成様の大事の文。地御届け給はれと差出す文箱を受取つて。詞こりや姫君の御尤も。我も人も待兼ねるは火の遠い伽羅と嫁入前。地早うお迎へあるやうに執成を申しましよと。立つて行くをア、コレ申し。まだ口上がござんすと聞いて梅苑居直れば。詞知らしやんす通り。妾が舅山上の次官は入鹿公に命を取られ。又入鹿公の親御蝦夷大臣は夫源内左衛門首を取る。光成様と蝦夷様とは伯父甥なり。入鹿公とは従兄弟同士。夫親子は姫君のめのうと。互に意趣しある中へ嫁入する心も無い。先づ不縁なと思し召し。縁を斷つて給はれと。地文には委しく記せども猶口上にて許嫁。是非變改を致せとの。お使なりと云ふに悔り。詞フウそんならば此文は。姫君様より光成様へ暇の狀でござんすの。アイまあいへばそんなものと。地聞くより梅苑

身繕ひ。詞コレ櫻井。其方は三輪の神主大之進といふ禰宜の娘。武士の作法を知らぬ故此お使に御座つたの。暇の状といふものは殿御の方より行くは法。終に世の中始つて。女房の方から旦那殿を去狀とは是が初。地こんな取次わしや知らぬと文箱も割れよと打付くれば。櫻井くわつと氣をせき上げ。詞コレ梅苑。一世一度の三行半澤山さうにこりや何ぢや。禰宜の娘であらうとも山上源内といふ武士の妻。女の方から縁斷るも術に寄る事に寄る。縁に觸れたる敵同士。劍の刃を渡るやうな嫁入は成りませぬ。約束變改常の例。地鈍な取次頼まうより直に届けて直に云ふ。其處を通しやと行かん。とす。立隔つていつかな。詞此梅苑が居る内は無法な者は奥へは入れぬ。イヤ推參な。イヤ慮外なと。地彼方を留むれば此方へ廻り。透を見合せ。フシ行違ふ。地色どつこい遣らぬと後より。そつてふうわり蹶られてぐわつたり。膝でにじれば立身てかゝり。互に挑み争ふは。珠數に繋ぎしげんげ花。フシ揉合はせるが如くなり。地色奥より光成主税之助走出てて引分くる。光成卿左右を宥め。詞心を鎮めよ櫻井奥にて様子つぶさに聞く。一理あるには似たれども次官が首を取らるれば。蝦夷も命を果したり。互に意趣を残すなと勅諭にて和睦せり。又我が爲に蝦夷は伯父入鹿とは從兄弟なれども。藤原姫と縁を組めば姫は妻なり鎌足公は舅なり。親しみを較ぶれば鎌足公へは縁深し。姫が仕方は憎けれど。許嫁ある上は何時まで夫婦なり。地此分にて去なれずば文引裂いて返すべし。それそれ主税と仰せに任せ文を披けばこは如何に。思ひも寄らぬ一味の神文。詞蘇我の入鹿無道なりと雖も。父蝦夷大臣が最期の怒りを宥めんが爲。大臣の官に任せらるゝ所。數日も經ずして政道を我儘に執行ふ。殊に天皇に戀慕深く叛逆に遠からず。忠勤を擯んで誅伐を加ふべし誓ひの詞は讀むにも及ばず。鎌足公へ。石川三位光成と。地讀むに各胸開けば櫻井は遙かに退り。詞光成様主從のお心を見やう爲。夫が參る筈なれどそれと知らせぬ妾が使。神文に及ばねども入鹿公にも御因縁。地申し開きの御爲に御判遊ばし候が。御夫婦仲の色直し。聲高なりしは鶴の聲今手をつくは鶴の形。嫁入を松竹千秋樂。フシ萬々歳と祝すれば。地色光成殆ど御悦喜あり血判して返さんと。御佩刀を寛け給へば

主税之助押留め。詞天子の爲を存ずる故主従様々胸を碎くに。餓くまで心を探られて其上直に血判とは。さながらも姫君に心惹かれし様に見え。人の識りも憚りあり。地先づ神文は此方に留め御祝言の日を改め。某御迎ひに參る時此神文に御判を据え。嫁入の御與と引替へに致しなば。雙方圓く調はん此儀。如何と尋ねれば。地色光成卿も御得心櫻井は横手を打ち。詞兩家の一分立つた簡誰か否と申しましよ。光成様の御心底委細は歸りて我君や姫君様にたくりかけ。咄しましたらお悦び。地いざお暇と立出づれば梅苑も跡に付き。詞何にも知らいて最前は。ほんにまあはしたない。されどもお髪は損ねもせず。何處も痛みはしませぬかえ。何のお主の爲ぢやものさすつた様に存じます。地さがない事はわしからと云へどびり／＼正眞の。痛み入つたる互の仕儀。始めに變る睦まじさ。光成主税主従の笑顔に跡におさらばと。詞に花の櫻井は立別。れてぞ。三重へ行く道の。地ゆがまぬ君と神南の行幸もはや日を重ね。今日は還御の御名殘珍集珍膳を盡し。供御に參らす味酒の。フシ三輪の山路ぞ賑はしき。地色麓へ颯と吹下す。風に逆うて來る侍。入鹿が郎等坂熊九郎遙か下郎も高振りて。主の使の進物は目八分を十分に。いかつがましく見上ぐる山。豫て心を合したる神主高木大之進。樓よりも瞰下して。フシ鳥居の前にぞ出て迎ふ。地坂熊九郎進物の太刀前に差置き。詞主君入鹿の大臣天皇を憧れ給ひ。其戀を叶へん爲。萬乗の御位にそなはり給ふ御心。百官百司は云ふに及ばず。猫鼠に至るまで身の毛を立てて怖ぢ隨ふ。只今内裏を乗取り給ふを。只しぶときは鎌足主従。いで支へんと跪けども。龍車に向ふ蟲同然鎌足は早や負色。先頃も申す通り。天皇を奪奉るに。お怪俄あつては無調法。今日の還御を幸ひに術を以て渡されよ。地然らば惑々正四位の中納言となし。大和半國賜はる事相違無き證の進物。詞黃金作りの太刀一振。是のみならず御邊が娘の櫻井は。源内が妻なれば赦すべき者ならねど。此事を仕果せなば源内夫婦も助けんとの御事。有難く思はれよと。地聞くに悦ぶ大之進進物を押戴き。詞冥加なき御頼み故種々に愚案を運す所。只妨げは八王一人。幸ひ還御の後備神酒を勧めて遅參させ。欺すに手なしと刺殺さん。地色それまでは此下の三輪町に屯あり。還御

の樂をお聞きあらば各急に御登り。天皇の御車を手渡し申すは某が。案の内に候と。フシ手に取る如き詞の末。詞オオ天晴なる上分別。地必ず手筈其通り手柄は面々身の爲と。打連れ行くも御褒美を。オクリ町端れにぞフシ下りける。地色跡に残つて大之進爲濟し顔に打鎖き。詞天運も至れば至る。心の障りも打拂ひ。出世の望みも一度に叶ふ。地泰や満足やと。然に鋭き太刀作り目を光らせて見る所に。此方の山路に慌忙しく女一人餘所目も振らず。走る拍子に進物を。はつしと蹶飛し其身も倒れ。ほつとばかりに息をつく。大之進腹を立て。詞扱々無禮な女郎めかな。大切な此進物。蝶や花とも見て居るを土足に懸けて蹶散らかし。御赦されとも吐さぬは。何奴なるぞと太刀押取り。地色引立て見る顔と顔。ヤアわりや娘の櫻井か。ほんに父様大之進様。餘り急いでよう見なんだ。何彼なしに聞ひませう。天皇様のお身の上何事もござんせぬか。やはり館に御座んすかえ。地ちやつと知らせて下さんせと。せり立てられて詞ア、やかましい。天皇に御怪俄あつて大之進が立つものか。御安體にて我館に。御入あるはと云ふに落着き。ハツア嬉しや天の助け。さすがは私が父體ぢや頼母しうござんする。地色サア御座所へ行きましよと。走り行くを押留め。詞何をうと騒がしく。汝ばかり合點して急ぎ廻るは何事ぢや。様子をいへと尋ねれば。サア小短う云ひませう。妾は使者に参りし故。歸りてお返事申す折柄。入鹿が内裡に暴廻り百官を切斷け。三種の神器も奪ひしよし。聞くより驚て驅着けて。鎌足様夫源内。命を限りに軍最中。天皇様にお報せ申し。八王殿と心を合せ。是より密にお供して。鎌足様の新御殿へ忍ばせ参らす大事の御用。地色サア父様も共々に。力を付けてといふを打消し。詞假令如何なる騒動ありとも氣遣ひは少しも無い。コリヤ娘よ。父がいふ事篤りと合點せよ。忝くも入鹿公は。御父蝦夷大臣より御威勢強く。政道は御身の儘。百官自然と隨ふは天の與ふる御位。遅かれ疾かれ鎌足も隨はねば命がない。地幸ひかな入鹿公より某を頼み。天皇を奪ひなば。正四位の中納言となし。大和半國下さるゝ。證に賜はる此御太刀。詞父が是を爲果せなば。其方達夫婦が大きな仕合。地色委細といへば時刻が移る。父が館に忍び居て。天皇八王に報せは無用。

嚙吞込んだか胃脘へ落ちたか。地色娘とうぢやと云はせも果てず。突退けてつこと聲。詞コレ父様の大悪人。神職を
 勤めながら。入鹿といふ魔王の魅入。胸の鏡が曇つたの。地心の錯た其太刀を。私はようも厭散した。斯かる様子を
 知る事も天皇様の御運の強さ。詞今の詞に隨はど。此方の蔭て夫婦とも逆礫にかゝります。並大抵の異見ては。よ
 もや合點さつしやるまい。地親子の縁も是限り。此方から勘當ぢや。隙取つては猶大事と。行かんとするを後より。
 引展して入れ替り。是はと娘が寄る所を。はつたと睨付け。詞おのれ大事を打明けさせ。愛怨盡しをよく吐すな。天
 皇に告知らさば。父を殺すも同じ事。親が悪い事はいはぬ。某が詞に付け。厭と吐すとコリヤ。此太刀で討殺すと。
 地嚇しの刀拔鬚せば。ア、コレ父様。まあ待つて下さんせ。詞そんなら父に隨ふか。サアそれは。サア何と。合點す
 るか殺さうか。地サア／＼と追廻す。子故の闇に運ぶ足。道を思うて逃ぐる足。親子の心入違ひ。亂れ騒ぐは花
 山に。風雲走る如くにて。フシ見るも危く切なさよ。地色櫻井心を取直し父が持つたる太刀の下。掻潜つてしつかと
 取る。詞ヤア抵抗かと振放し。地留むる心の背打を。受けて驅出す後より。親の因果が子に報い。手の内廻つて。一
 刀。肋を深く斬込まれ。うんとばかりにのり返る。父は慌てゝ太刀投捨て。ヤレ櫻井よ娘よと。呼生けつ抱擁へ。切
 られし者より色變り。スエテ介抱。するぞ騒がしき。地色山上の八王丸大之進を尋ぬるに。かくと見るより訝かしく。
 フシ鳥居の陰にイミ聞く。娘はやう／＼息出てて。エ、父様胸慾な。詞コリヤ眞實殺すのぢやの。其太刀を奪ひ取り。わ
 しやこな様を斬る氣は無い。此場をさへ通れなば。天皇様や八王殿に。内裡は入鹿が亂せしと。告參らせて館を落
 し。鎌足様へ還御あればこな様の科知れず。命に障りもあるまいと。心に庇護ふ効も無く。地ようも酷う手に懸けて
 娘を殺す無得心。非業の死をするのみならず。大事の御用を告げもせず。お主へは不忠となり夫へは義理を缺き。帝
 の歎きも妾が科。此深手の苦痛より。それが苦しい悲しいと。わつと叫びし涙にはフシ血沙も。濯ぐばかりなり。
 地色娘の恨みと苦しみに父も涙に咽びしが。大地を打つて大之進。詞ア、淺ましや。謀計は眼前の利潤と思ひ。忽ち

罰を受けしよな。僅た一人の娘ぢやもの殺す心で何の打たう。詞其方が夫聲の源内左衛門は。入鹿が爲に親の敵。縁を組んだる中なれば。共に命を取らるゝは。鏡に懸けて危さに。地色汝夫婦が助かるやうに我明神を祈りし所。詞入鹿が頼みし一大事。是究竟と與せしは。其方と聲とが命を庇護ひ。陪臣の名を削捨て。高位を望む大愆心。背打の手が廻り。却つて娘をあやめしは神罰直に當りしと。思知つたるフシ悔しさよ。地しかも因果と深手なれば。最早命は堪るまい。詞我惡心を止まれば。天皇様に凶事は無い。其方が命のある内に。父が自害をするを見て。地せめて心を霽してくれ。娘さらばと云ふ聲に。櫻井は猶身を悶え。這寄る力も泣く涙父は刀を取直し。突立てんとする所を。八王透さず飛んで出て。刀の柄を握り留め。詞一々様子聞届けた。八王丸ぢや櫻井殿。兩人共によく聞かれよ。櫻井殿の深傷は。父を善心に歸せし故。是忠孝の最期となる。大之進の自害とは。善にもとづく詮も無く。天子の御用に立たずして。是大死と申すもの。斯かる折柄一人にても。御用に立つて死なれよと。地色血氣盛の若者も武家に生れし道理の金言。大之進は伏拜み。忝き御了簡。兎も角もとは云ひながら。現在親が手に懸けた。娘の深手が不慙なとスエテ又立ち。寄つて泣叫ぶ。地臨終の娘は聲を上げ。父様嬉しう。フシござんする。詞ソレ其太刀は。入鹿が贈りし進物なれば。こな様に切られはせぬ。敵といふは入鹿主従。討死をして下さんせ。未來で必ず逢ひませう。八王様は何處にぢや。もう目が見えねど。源内殿は。面影にけく見える。地さらばとばかり云納め。フシあの世へ息は引入れたり。地色兩人涙に暮れながら。大事の前と死骸を隠し。八王屹度思案顔。詞帝に様子を知らせては。却つて觀慮の痛みとなる。コレかうくと。地囁きて互に領く草の露。フシ謀し合せて入りければ。地程無く調ぶる物の音は。今ぞ還御と長慶子の。音樂高く。三重聞えける。フシ待設けたる。坂熊九郎大勢引具し入り来る。時刻を違へず大之進。祭に引出す御車に。山田をかへす牛を付け。坂熊九郎に引渡せば。出来た。大之進。直に同道サア来いと。フシ皆引連れて急ぎ行く。地痛はしや天皇はかくある事も知り給はず。藤照姫に御免あり同車に還御し給へば。供奉も斑に

出立ちて。後陣の警固は八王丸。靱慮を安め奉らんと。お車の止まるも。故と急がず。フシ控へ居る。地天皇車の内
 よりもなう藤照。古き歌にも戀しくば。尋ねても來よ我宿は。三輪の山もと杉立てる門。かく詠めしは此邊り猶途
 すがら歌枕。共に詠めて語らんと。フシ靱慮穩か。なりければ。地色八王車を轟かせ十町ばかり行く所へ。坂熊九郎
 が軍勢ども。息をはかりに群り寄せ。中にも坂熊首引提げ。詞ヤア／＼八王。大之進に云含め。某を誑し。よく空
 穀を渡したな。瘦骨にて暴れたる。かす禰宜が首是を見よ。其御車を渡さねば一々に此通り。返答如何にと投付けた
 り。八王丸ちつとも騒がず。帝に騒動知らせじと。命を助け歸せしに。死にうせたはござんなれ。地八王一人が千萬
 騎。寄手は何萬嫌ひなく。掴みひしき腕振折り。五體を碎いて慰まん。サア來いやつとぞ待懸けたる。地物な云はせそ
 討取れと。一度に寄するを巻り立て。先に進むを入蹊。只一揉に追拂へば。こは叶はじと一同に。フシ命大事と逃
 げて行く。地オ、左も爾うずと立歸り。驚き給ふはお二方。是から半より逸散と。オクリ車をへ引いて入りにけり。
 地色入鹿が大將縣の押照。かくと聞くより驅合せ。坂熊八郎も引返し御車を尋ねかね。詞よもや遠くは行くまじと。軍
 勢ひしめき合ふ所に。押照遙かに眼を配り。あの松原に車あり。軍兵續けと下知をなし。地飛ぶが如くに驅けたる勢
 ひ。牛も仕丁も散亂し。跡に残りし御車を。フシ悦び勇んで引戻す。地難兵左右に引包み。押照坂熊前後を圍ひ。
 詞サア是こそは天皇ぞ。いて龍顏を拜せんと。雙方立寄る車の内。地四方へぐわらりと驅放して。車蓋を押上げ八王
 丸。すつくと立つたる有様は。堅牢地神が須彌山を。フシ指上げたるもかくやらん。地各ぎよつと驚くを。八王ハツタ
 と睨付け。詞汝等が望む天皇は。兄源内左衛門が御迎ひに來りし故。お心安うはや還御。追人の奴原踏ひしやくは。
 此八王が承る。體に名残を惜めよと。地車蓋をくわつしと打付くれば。前に進みし雜兵が。フシ眉間を割られて死し
 てけり。地縣の押照聲張上げ。詞妨げをなす上に斯かる慮外は推參至極。せめて己れを生捕つて。入鹿公への御土
 産。八王覺悟と言はせも立てず。くつ／＼と吹出し。此八王を生捕とは。蚊の脚にて大石を踏割らんとする同然。サ

ア此儘に引いて行け。此山本の其外は。地引くとも押すとも動かじと。フ勢ひかゝつて立つたりけり。地ヤア緩意なり此車。引けや押せと云ふ儘に。ぎり／＼と三間ばかり。江戸引くと見えしが八王丸。金剛力士の力を出し。五體の重さは大磐石。ナホス兩足どうと踏据ゆれば。先へは一寸にじりもやらず。後へ戻せば力を弛め。ぐわら／＼ぐわらと引返し。元の所を行過ぐれば。力を出してしつかと止め。同じ山路は踏みゆるめ。車は引きつ引返し。どろどろ／＼と鳴渡る。地木魂の響えい／＼聲。八王車を揺り据え。大地に入れよと踏む足音。大千世界の雷を。フシ一度に聞くが如くなり。詞さつても太儀ぢや日雇の衆。一生の草臥休め。首引抜いて取らせんと。地車の上より飛んで降り。山も崩るゝ聲を懸け。大輪に廻つて一ツにびひ寄せ。難立て揉立て打散らされ。大將押照押しなめて。フシ足を空にぞ逃走る。地手に立つ者も無かりしと拳を握つて立つたる所に。車の後に隠れたる。坂熊九郎が主従二人。捕つたと左右に執付く所。家來をうんと撲殺し。坂熊九郎を引廻し。だうど打付け頭を踏へ。弱腰纏んで身を逆様。詞おのれは優しい腕立なれど。一度の懲せず二度の死。大之進が敵と云ひ。天子に敵對奉る。逆討とは此事と。地力に任せてえいやうん。フシ體を引抜き捨て／＼げり。江戸軍始めに勝色の心地好げなる山上前髪。生抜く忠義に勇む足。とどろ／＼と山道を飛越え跳越え。躍り越え。響くは谷河騒ぐは杉の。山嵐神の力や勇猛力。天地の力諸力。數へ數へて八王丸緊那羅摩睺羅の勢ひも。取拉ぐべき若者やと代々に。傳へて口ずさむ

第 三

地人は一時の凶暴を以て天に勝つと雖も。天定つて強惡の人を破る。理を辨へぬ入鹿の大臣帝に心を懸念も。行幸の跡を押領し。淵は瀬となる飛鳥の都。己れと天子におしなれば。縣の押照羽黒の嵯峨丸。身の程知らぬ左右の大臣。陪臣下郎も官位を授け。長袖に猶臂を張り髭に支ゆる冠の緒。跡先括らぬ驕の體。殿上人と云ひながらフシ空恐し

ぞ見えにける。地色今日ぞお召しと百姓ども門外に差集ふ。中にも河内の弓削の者勅詔の物なりと。白木の棒を臺に懸け御前に直し引下る。嵯峨丸押照見改め陛下にかくと奏すれば。帳臺の御簾すら／＼と。巻上げさせて入鹿の大王。玉の冠衰龍の御衣。左右の袖は鵬の翼。千里も覆ふ其勢ひ。只戀ゆゑの一心に百官を押靡け。自然と我を高御座。桓々と見下して。詞ヤア士民ばら。朕位に備れども肝腎の望み達せず。仔細に依つて軍は絶えじ。火花を散らさば汝め等も先陣の燒草。老耄どもは用に立たねば。捻殺して山河へ捨てさすべしと思へども。年だけの智恵もあるかと。此木の本末しらせよと吩咐しが。七度生れ變るともいつかなく。無分別面押上げて吐せヤツとぞ仰せける。弓削の庄屋白洲を這寄り。お御意の通りを毎日毎夜。村中の年寄が豆茶で智恵を揺り出し。此棒を早川へ流し。川下へなる方が木の末ちやと申す故。川へ流して知り候。即ち西の方が末。地東は本でござります。御褒美には及びませぬと。云ふに兩臣顔見合せ。案に相違の入鹿の大王。さあらぬ體に苦笑ひ。詞三筋足らぬ猿松めら。早川に流し見て本末を知る事を。うぬ等風情に習はうか。見たばかりでも知れば知る。蔑ろに推參至極。此木の代りに殿閣に使ふ材を。フシ棒に振つたと入りにける。地色次は當國芳野の者。鳥羽を布に載せ御前に畏り。詞鳥の羽に書いた字を讀んで見よとの御仰。黒い羽に墨色知れず。どうしても御無理様。讀まずば定めて殺さるゝ。命賄の工夫物。羽を蒸して布に當て。墨をうつして候へば入鹿大王と文字あり。地御鹽下され候へと。入鹿が前の智恵袋。ふるひ／＼も出来し顔。嵯峨丸布を取擴げ御覧覽と差上げれば。入鹿も是には我を折りしが。弛みを見せぬ唸り聲。詞鳥羽の字を讀めとは。おのれ等にこそ吩咐けたれ。蒸して文字を現はせしは。そりや蒸籠が讀んだといふもの。其上朕が名を蒸立て。六文字にうつせしは調伏すると覺えたり。過怠に布を五千匹。相違無く差上げよと。地叱付くれば皆がつくり。鳥に墨の難題を。フシ上塗してぞ歸りける。地色續いて長柄の百姓ども。繩を繰いて土臺に載せ。庄屋徳助振返り。詞コ

レ皆の衆岩次も聞きや。灰を繩に縋へとの御意。岩次の智恵で出ことは出来たが。先刻にから來た衆は首尾散々で歸られた。何と過意を受けようより直に去なうちやあるまいか。いや／＼去んだら猶過意。地若し御機嫌に違うたら。其處が又年寄の智恵。岩次一人を突出さうと。やう／＼差上げ蹲る。押照近く立寄つて取らんとすればア、申し／＼。調いらふと忽ち切れまする。村中への仰せ故。灰を繩に縋ひましたと。地申し上ぐれば入鹿の大王。猶も逆立ち突立上り。調ヤア有罪餓鬼の太がたりめ。繩は物を繋留め。強きを以て其益とす。指をさゆると切れる繩は何の爲何の益。脛を嘲ける蠅蟲め等。命を取らうか過料にせうかと。地横に車のわな／＼と百姓どもは戰慄出し。岩次を前に突出せば。老眼に氣を張詰め大王の顔形。ためつ。すがめつ捻寄り摺寄り。さつても似たり。似た／＼と。地云ふを庄屋が袖を引き。調爰は御殿ぢや何いやる。似た／＼と獨言。何方様が誰に似た。さればいの。去年の夏秋此方の門へ。のら／＼と來た大男。親の勸當受けまして。彳亍方の無い者ぢや。餓死を致します。隠匿うて下されと吐餓るさうに頼んだ故。半月ばかり隠匿うた團六といふ者に。あの入鹿大王様が。似たとこそいへ生寫しと。地色いへば庄屋は笑止がり。粗相云やんなコレ岩次と。目交をすれと見向もせず。入鹿が顔を打眺め。立寄つては不審顔。下れ／＼の聲につれ。横に退つて目を残し。見上げ。見下し打鎖ぎ。調ホウ團六ぢや／＼と。地覺えず近く這寄れば。入鹿も覺えある故に。御座をうぢ／＼居直つて。面を振れば嵯峨丸押照。ヤア老老の慮外者と。叱るに構はずにた／＼笑ひ。調フウ入鹿大臣殿様とは。わごりつ様ぢやの。勸當の内隠匿うた。岩次ぢやが見知つてか。見ぬ顔はそりや胴然。去年の事忘れてか。娘めは參宮の留守なり。犬の手も人の手にしたい時分。頼むというてお御座つた故。何處の息子か知らねども。見た所がかつぽくも好し。小力もありさうなり。在働きをさせうまでと。嚙にやう／＼吞込み。飢を救うておましたぞや。お蔭で命繫ぎますと。其肥えたお手できたなう拜み。茶瓶の様な目の玉から涙を滴して。禮おもしやつたそ様が。扱今はいかいお出世ぢやなう。お目出たいと申さうか。お酷いと云はうか。地ちつとも恩を思召

さば。無體な事はおしやますなと。恨み歎きに座も濕り。横紙破りの大王も。恩は有やう理窟詰。見合す顔の赤面は。常より赤く照添ひて、フシあたり眩きばかりなり。地色入鹿は詞を和らげ。詞長柄の里の岩次オ、よく見知る。恩を知らぬにあらぬども。大望に支られて今までは延引せり。今日逢ふこそ幸ひなれ。何事にても望むべし。恩返しに叶へて得させん。いかに／＼と仰せを聞くより。ハ、ハツと頭を下げ。只今申すも憚りあれど。詞なう何れも。上を知らぬ我々が。入鹿公は惡王ぢやと。譏り捨てたる惡口。見ると聞くととは大きな違ひ。さすが天子の御恵み。恩返しなされうとは。下々を憐みの。お情深いが顯はれた。地共にお禮を／＼と。云ふに皆々手を合せ。ハア難有やと一同に。伏拜み伏拜む。中に岩次は土に平伏し。詞忝き御仰せ。外に望みも候はず。地長柄の里の繁昌を。冀ひ奉ると言上すれば。詞易い事／＼。津の國は海を抱き大河をあて。南暖に北寒く。要害よくて五穀熟す。故に朕長柄の豊崎に。都を移す心あり。然らば自然と土地の繁昌。地是汝への恩返しと聞くに岩次は遙かに退り。冥加なや難有やと。庄屋も共にこれはまあ。地獄にも知る人と。フシ悦び勇むぞ道理なる。詞オ、悦ぶは尤々。土地を繁昌さすからは。村中として壹萬貫。鳥目を差上げよと。地手の裏反す恩を仇。詞そりや王様胸慾と。半分云はせずどこへ胸慾。天子には父母の恩さへなし。況やうぬ等が恩呼ばはり不屈千萬。壹萬貫が遅なはれば。かたはしに水平。地立つて失せうと脱廻し。押照嶮丸引通れて。御簾に入ればこは如何にと。岩次は見送る庄屋は引留め。詞何にも云うて貰ふまい。壹萬貫と詞にも煩張る貢物。云譯する程わらが出る。さしばかりの庄屋に任せ。地早う戻りやと引きずられ。何も岩次が口惜さ。御殿を脱めど詮方も。オクリ泣く／＼へ里へぞ歸りける。地世につれて共に絡まる藤原の。フシ鎌足夫婦諸共に。入鹿が召しに隨ふは。心にあらぬ參内を。取次かくと奏すれば。地紫宸殿にて對面せんと。公卿臣下に敬はれ。ゆすり出でたる入鹿大臣。殿上の板敷を堂々たる其有様。天地も狭き威風凛々。金輪際より生拔きし。欲天の摩薩首羅。フシ魔界になすかと凄じし。地色此有様を見ながらも鎌足の御目には。禁裏は荒れて人住まぬ。野原と

なりしか淺ましやと。摩利四天の怒りをも内に包みし柔和の臣。御臺も共に渡殿より。眺め渡して魂に。フシ涙を
 沁ますばかりなり。地色嵯峨丸押照詞を揃へ。詞ヤア／＼鎌足。大王の出御なるぞ。是へ寄りて三拜せよと。地色飽
 くまで嘯く不敵の詞。聞くよりくわつとせき上し。つか／＼と歩み寄り。入鹿をきつと見上せば。見下す入鹿は天子
 の威光。奇怪なりと兩眼を。八角に見出して。ハツタと睨めばする／＼と御臺の許へ跡退り。居居に擡と座したりし
 は。六十餘州を手の内にフシ入鹿が。威勢ぞ類無き。地色夫婦隨ふ風情を見て。詞ヤア押照嵯峨丸。代々棟梁の臣と
 呼れし鎌足。今日の對面に。彼が敬ひ畏るゝは。これ我威勢のなす所。とは云ひながら鎌足に油斷は成らぬ。地彼奴
 が連れたる家來ども門外へ逐拂へと。仰せを受けて兩人はフシ嬭で御前を立出づる。地色跡に夫婦は顔見合せ。薄き
 氷を踏む如く。危くは思せども再び天下を泰山の安きに置かんと。左あらぬ體に鎌足公。詞ヤア仰々しき御振舞。お
 召しに隨ひ參内せし女連。一人の鎌足に御心を置かるゝは。憚りながら大王とも覺えずと。地宜ふ詞を御臺は引受
 け。詞お心を置き給ふは。我々が敵對もせうかとの事。オ、きついお疑。皇極様は君の戀人。隠匿うたは身を思ふ
 から。地夫婦が心を竹ならば洗になして見せたいに。節矣立ちしお詞と只織竹に和らぎて。フシ根も葉も無くぞ見え
 にける。地色入鹿面色打和らぎ。詞ム、其咎々々。何皇極は健康なか。軍を起し辛い目憂い目。心穢らさば其方から。
 靡いて來うと思ひしに。様子聞かねば氣遣はしく。汝夫婦に仔細を尋ね。且は此戀取持たせんと。其爲に召寄せた
 り。エ、思へば胸怒な皇極。此入鹿が一度怒れば天下亂れ。安座すれば四海治まる。只あの女一人を。隨へること成
 らずして。地心を碎く無念さよと。不思議に浮む涙を隠し。睨付けてもはら／＼。車軸の雨に日月の。フシ照輝
 くが如くなり。地色鎌足近く立寄つて。詞左程宜ふ戀慕の心。誠と思はぬ仔細あり。御勘氣の其以前は。未だ昇殿を
 許され給はず。天皇の玉體を拜し給ふ謂れなし。但し見ぬ戀に憧れ給ふや。又は天下に望み深く。戀に擬へ天皇に近
 付いて害せんとの御事にや。二ツに一ツの御返答聞かまほしやと尋ねられ。ホウさすがは鎌足尤もの問事。天皇の美

人の聞え日本に隠れ無し。我れ見ぬ戀に憧るゝ折柄。元日節會の夜目遠目。御姿をちらと見しより。いよく増つて思ひの種。度々の艶書に事顯はれ。勘當流浪の其間も片時も忘れず憧るれども。我戀ばかりは一天下に媒介なし。所詮位を奪ひなば天皇は此方のものと。地色今大王には成りながら。憂き物思ひを推量せよと。語れば鎌足。から／＼と笑ひ。詞人聞かざるお詞。誰か左様に思ふべき。其御心誠ならば。三種の神器を此方へ渡し。天皇を天皇として。叡慮を宥め給ひなば。媒は此鎌足。地色然らば天下に敵對無く。戀も叶ひ威勢もます／＼。此戀は某に任せ給へと。言ふにぞく／＼ふわと乗り。詞コレ鎌殿。おことさへ吞込まば。大方は埒明くべし。入鹿が天下を望むならば。三種の神器は力にせず。地まして戀さへ叶ひなば。いかにも渡さんさりながら。詞御邊が館へ寶を持參し。天皇と縁結び。其上にて渡さんと。地戀に釘さす詞の末。鎌足御臺に目くばせし。ずつと立つて行過ぐるを。詞待て／＼鎌足。返答なく座を立つは。違背に及ぶか何と／＼。イ、ヤ違背にあらねども。是此胸にあるべきこと。天皇に戀慕深く。天下を奪ふ心は無しと。帝に寶を見せ奉り。叡慮を安め奉らば。恐らく此戀叶へんと。思慮をめぐらす効も無く。某が詞を疑ひ。只今寶を渡されずば／＼戀は叶ふべからず。地叶はぬ事に長居は無用。いざおさらばと立出づるを。入鹿透さずつゝと寄り。首筋擱んでどうと打付け。これはと御臺が寄る所を拂ひ退けて怒りの胴聲。詞天下を覆す丸が戀。ふつ／＼と叶ふまじとは忌々しき顯た骨。今一言吐出さば微塵になしてくれんずと。地持つたる笏にて冠をはたと打落し。睨付けたる其勢ひ。御臺は焦慮り墮りかね。入鹿に咬付く氣色にて。寄らんとするを鎌足公。髪束取つて下に引敷き。詞サア抵抗は仕らぬ。申したき一言あり。怒りを鎮め給はれと。地詞を盡し押宥め。御臺を取つて引起し。詞女は人我の相深しとはおのれが事。眼相變りし立舉動。御怒りの最中なれば。夫の難義を詫びるとは。よもや思し召されまい。今某が引据ゑられ。冠を落されしは。身に覺えある天罰。地天津兒屋根の先祖より。天子を守護する我身にて。入鹿公の戀慕を逆ひ。帝の位を降居させ。我館に引込みしは。殖生の小屋のお住居詞然。

斯かる罪ある某なれば紫の冠は似合はず。入鹿公の手をかつて天より我を罰すると。フシ思ひ知らざる愚さよ。入鹿公も某も。天皇を大切に思ふ心は同じ事。戀さへ叶はゞ御位は元の如くになし給はんと。此間夫婦とも天皇に勧め参らせ。今日参内するを幸ひ。地色猶大王の戀慕の心。探り知らんと計りし故。ふつ／＼戀は叶はぬと。偽り云ひしかくなる覺悟。詞されどもお怒り強くして。若し我命を果しなば。天皇の御代にもならず。入鹿公の戀も叶はず。地とお二方の御爲に。我身ながらも大事の命。詞アレ今こそ逆鱗鎮まり給ふ。女の事ぢや御免を蒙り。一命を助かるやうに。お託申すが夫の爲。地腰を屈め膝を折るとも。恥とは更々思はぬと。口には云うて心には。我こそ入鹿を亡して再び御代に返さんと。碎くる胸を撫摩り。天下の爲の啣泣フシ有難くも又哀れなり。地色御臺も涙に伏沈み。夫の心酌みかねて。詞彼方へお託と申すのは。天皇様と縁を結ばせ。其上にて御寶を受取りませうと云ふのかえ。ハテ云はいでも知れた事。何を云うても某が命が無ければ。ナ。お爲にならぬ合點かと。地心を知らす目遣に。御臺は戀で打領き。入鹿が前に立直り。詞お聞きの通り此戀は夫婦の者が取持つ心。御位をさへお渡しあらば天皇様も御得心。最前の仰せに任せ。妻が忍ばせ参らせん。地三種の神器は其後の事。お心を見よう爲。夫が詞の云過し。幾重にもお赦しと。云ふに入鹿は弛み出し。詞ハテ慇懃な何の詫言。聞けば夫婦がいかい世話。知らぬ事として鎌足御免。地色帝の爲に大事の寶。此方に取置くは。戀を叶へん爲なれども。詞天皇其方達が思ふにも。帝位の望みは誠にて惚れたと云ふは偽りかと。疑ふ事は尤々。眞實底から戀故なれど。入鹿は地獄も恐れねば誓言も贅事なり。兎角心を引いて見よ。天皇と縁を結べば位は渡す心入れ。地いよく早う媒を。フシ頼む／＼と手を摩れば。詞ア、申し勿體ない。なう鎌足殿。御機嫌が直るといひ。大方お心見えました。地色幸ひ明日は日柄も好し。密かに忍びて御通ひ。戀に心を盡す體。寢間の睦言御鍛錬いざ夫婦ともお暇と。立ち上つて鎌足公。勿取直す風情にて。入鹿がきたる冠を。かつしとばかり打落す。是れはと入鹿が怒るを騒がず。詞ア、まだお心が知れぬ／＼。戀さへ叶はゞ御位に望み

は無いとの御仰せ。玉の冠は天子の物。打落され給ふとも。戀を取持つ我々に。其お怒りはあるまい事。地戀に心が。薄い／＼と云はれて入鹿。詞ウ、扱は心を引くのぢやの。腹は立てぬぞ退出々々。地ハツと答へて兩人が。戀の媒、立出づる。南殿より見送れば。渡殿より見返りて。上は生鈍心根は。研ぎすましたる鎌足夫婦連れて館へ三重へ歸らるゝ。地王者は四海を家といへども入鹿が惡逆日に長じ。天皇玉の臺を離れ鎌足館に移らせ給ひ。雲に隠るゝ日月の花の御遊も。徒に。御心痛む折柄に。今宵まれ人通路の吉祥吉日良辰とて。目出たき事を云並べ。鎌足夫婦が計ひに。御心に染まねども新御殿に出御あり。官女侍従が立並び。入鹿は戀のやさ者と囁き笑ふ噂をも。御簾に響きいとゞ猶。フシ宸襟惱むばかりなり。地鎌足公の御臺所松竹植ゑし島臺に。長柄の銚子のし／＼と自身携へ長廊下。ステテ御殿間近く手を仕へ。詞恐れながら奏聞と御簾に向ひ。誠に君聖帝とは申せども入鹿が逆威に襲はれ。地色お力とては鎌足一人。元此起りは強ち天下を望むにあらず。勿體なくも君に戀慕し。戀の叶はぬ恨みの謀叛。詞戀さへ叶はゞ三種の神器。帝位も返し奉らんと申すにつき。先達て申上ぐる通り。今宵此家へ忍ぶ約束。地色御身を穢され御名の汚れも民の歎きに替られずと。夫が諫めも奴慮に叶ひ。玉體危き案じも無く。悦びの捧物御鞆と奏すれば。御簾の内より天皇は御聲も訝え給はず。朕が身一つ失うて天下の爲になるならば。よきに計へ方々と。只一言の勅詔も。ステテ御涙に掻濁り。フシ共に袖をぞ絞りしが。詞ハア、有難き御賢德。自らが差上ぐる此島臺。下々にては夫婦仲。此年までと尉と姥。竹に鶴龜松は千歳。皆壽を祝へども。此方は聊左様で無く。鶴龜の飛ぶと飛ばぬは天地を表し。松と竹との青き葉も。地の潤ひし豊年に。民を撫てよの姥箒。翁のさらへは木の葉まで。皆お味方に搔寄する。取分け心を付けし此長柄。内にこめたは菊の水。劍で舌を切るやうな。冷やりとした氷酒。甘い跡ではびんとした。切れ口の好い名作名酒。入鹿公へ御馳走に。君が思ひを只一つぎ。ひるむ所を飛びかゝり。透さず私がくはへの役。つきつきかくる詞をば。ようおききすい遊ばせと。地酒で知らす長柄の劍。官女侍従はうつかりと。扱ても強い

御馳走。私等もそんな氷酒。相伴したしとあひしらふ。お心聰明く天皇は御簾の隙より白紙の。しらけて云はぬ言の葉を。覺るは神の知らせぞと。差出し給ふ心と心。フシ洩るゝ方なく見えにける。地斯る所へ表口入鹿王より御勅使と。呼ばはる聲にそりや何ぞ。起つて来たはと怯恐れ。官女は奥へ逃走るフシ御臺は。次へ出迎ふ。地色勅使の權柄、權柄、眞黒羽黒の嵯峨丸大臣。黒衣の装束、厚額。櫻の長みを首にひん巻き。玉座間近くどつかと座り。詞ムウ婦人は鎌足の御臺よな。入鹿大王の勅諭。皇極帝へ直々。地色取次召されと出る儘の過言。時の權威にはつと敬ひ。詞勅諭の趣、仰せ聞けられ給はれと云ふや否や。ヤア出過ぎた女。我君入鹿大王の戀人。皇極君は何處にぞ。案内せよと立上る。詞ア、これ申し。昨日まで六位以下。今假初の大員職。天皇を直々とは慮外至極と。云ふを脱付け何の慮外。天皇に遂に出逢はず。知らぬ神に祟の無い左大臣。大方此邊の御簾の内。地イデ直談と傍若無人。つか／＼と立寄る玉座の御簾。颯と上げて皇極天皇。山鳩色の上の衣容、麗の御眼尻。さすがの嵯峨丸目も眩み。フシハア、ハツと。ばかりに蹲まる。地天皇お詞和らかに。詞入鹿大臣の使。朕に對して直奏とは。如何なる事ぞと宣旨ある。嵯峨丸頭を持上げ。主人入鹿。君の愛着に迷ひ。是なる鎌足夫婦が媒にて。今宵此家へ忍ぶ約束。媒ばかりの得心覺束なく。直々君の御慮。承つて參れとの儀。御心慮如何と奏すれば。地天皇笑を含ませ給ひ。詞朕に心を迷はして入鹿が募る惡逆も。地色皆自らがつらいから天下治世と成るならば。引けよ隣かん夜の鈴妻戸の陰で待てと云へ。思はね人を思ふ程世に愛き事は。フシ無しと聞く。地よきに慰め忍ばせよと。仰せも軽くさら／＼と。フシ玉座の。御簾は下りける。地嵯峨丸横手を丁と打ち。詞扱々案じたより旨い穿鑿。此島臺も、壽の用意か。婦人も無きお取込み。鎌公へも宜しくと立上れば。地色御臺も嬉しく夜のおとに入御なるは。五つと四つの間の鈴。鳴すが合圖と傳へてたべ。つきつきなしに只一人。みすばらしいで戀増る。粹様計ひ給へとて。しと打たれて吞込んだ。詞お供に來ても隣餅搗。耳へ入る程口へは入らず。地色今宵は兎角酒盛つて。盛殺してお戻しと。辻占も好き挨拶に。此方も嬉しくいそ

いそと。フシ見送り歸す。跡よりも立代つて使者男。三位光成卿の執權。伴の主税之助と假名を聞き。取次かくと奏する内。御臺の目通り近々と立寄る武士の袴肩衣。折目正しく手を仕へ。調定めてお聞及びも候べし。主人光成都を立退き。津の國長柄の領地に居を構へ。世の成行をと身を退く。豫々御娘藤照君とは許嫁。只今流浪の身なりとも。よも御違背は候まじ。幸ひ今日最上吉日。御迎ひの輿押付けて持參。姫君お渡し下されなば。主人の大悦使者の面目。宜しく御沙汰と述にける。ヲ、尤もの使者太儀々々。光成卿都を立退き。津の國とは豫て聞く。遠々を好うこそ好うこそさりながら。娘遣ることまあ成らぬ。歸つてよきと思ひの外。地主税之助きよつとして。調先達て二心なき一通。源内左衛門に渡し心底はよく御存じ。何見落して。主人光成は嫌ひ給ふや。仔細承らんと立直る。御臺威丈高になり。ヤアいふまい。都の騒動に出逢はず。天皇此家に御座あれども。一度の參内も無く。世の成行を見んなどと。津の國へ引込む臆病。聲に取つて不足々々。調ウム其御立腹にて變改な。敵勢ひに乗る時退いて不意を討つ。是武の家で計略と申す。百官残らず入鹿に従ひ。主人一人天皇へ參らば。そも安穩に置くべきか。命を捨てて天皇のお爲にもならず。よし左程に宜ふお御臺が。入鹿が戀慕を取持ち。帝に御身を穢さする心底如何に。地色サア此返答何とくんとせり付けられて。サア其事は。調何と。地夫はかうしてどうしてと。いへども當座の間に合に。フシ好き抜口も無かりけり。地色折節鎌足立出て給ひ。調主税之助が不審。尤もながら愚な問題。天皇入鹿に隨ひ給ふは。下賤の智慧に及ばぬ所。御臺が不足も愚痴の至り。一旦の契約變ぜぬ鎌足。娘を今宵密かに送らん。暫く休息々々と地事を分けたる御裁配。主税之助も奥深く。退つて三拜御臺も領き。互に後程々々と。オクリ別れて奥に入り給ふ。忍ぶ身を。フシ誰が戀草の。土も木も。我大君の物ならば。此身も君に。巻れて。君に巻るゝ我戀衣。面まばゆく白きぬに。包む戀路に引かされて。忍び入鹿が。身の思ひ。引くに離くの綸言も。スエテ汗で身流す探足。調なう一生に斯程まで。物恐れせぬ身なれども。地戀は曲者後髪。骨身に通る。フシ恐ろしや。地色さあ是よりは合圖の鈴。

これや此方の組糸を。引けば引かれておゝと。出て来る人は誰ぞや誰ぞ。詞さう仰やるは入鹿様ではないかいの。此方は鎌公の御臺か。地成程首尾好し。此方へと。オクリつれて一間に入りける。フシ燈火をむけ。引合はす。痛はしや天皇は。面はゆげにも口惜く。御臺が媒取結ぶ。鳥臺出して二銚子。並べる内に入鹿はもちろ。猫に追れし鼠の顚ひ。フシちうの聲さへ無かりける。地色天皇土器御手に取り。朕が心は玉の盃の幾夜重ねん印ぞと下し給へば。入鹿は千度押戴き。こはくお傍に這寄り摺寄り。小暗がりにて盃事。どうやら滅多に氣が揉める。まあ一寸寢所へと。御手を執つて立上る。御臺は押留め。詞申し是は強い急きやう。地色夜長に緩りとお床入。まあ其天盃で。一ツく。詞いやく盃古いく。地長き思ひを今宵は齎す。日本開基の仕合者。あやかれ御臺と戯れ行くを押へて。詞ア、そりや御卑怯お手が悪い。地つぎかゝつたる此長柄。馳走に込めた氷酒。一つづつがんと立ちかゝる。君も持つたる手を振切り。詞臣下なれども今宵は殿御。地丸もお酌と又長柄。入鹿が心に不思議立つ。兩の眼は金銀の。土器取つて兩手に持ち。詞さあお酌。さあつけ御臺。地一つ受けんと身構に。天皇御心痛ましく恐ろしなから立ちかゝり。御臺も後れわなくと。慄へど共に付け廻す。入鹿は眼を四方に配り。心ゆるさぬ闇の酒盛。透間を狙ふ兩方婦人。長柄もわなく足もわなく。まはる入鹿は疊に膝節摺れつ。纏れつ柳のひな腰。亂れ亂るゝ鬼百合姫百合。薊の花に蝶々の。フシ戯れ遊ぶ風情なり。地色此場をいかで遁さんと。御臺は氣を据ゑそれと合圖の聲より早く。長柄の劔拔討に。討つてかゝれば撒潜り帝の刃に飛上り。續いてかゝる御臺が弱腰。引摺んで二三間。拂ひ投たる其隙に。帝の御手を取つて引伏せ。刃振取り乗懸る。なう悲しやと御聲の。口に手を當てしつかと押へ。入鹿が戀の叶はぬ恨み。思ひ知れと突通す。あつと一躍身に徹へ御臺は起立ち南無三寶。詞天皇様を手に懸けし。出合へ出合へと哮る聲。地家内どよめく足音人音。取巻かれては一生懸命。戀に絆され入込みしと。臣下百官笑ふもいかど。一先づ退かんと庭の飛石。柴戸蹴破り裏道をフシ心懸けてぞ歸りける。地色跡は北面四位五位下。山上兄弟折悪う。

帝の代參誰あつて追手にかゝる者も無く。騒立つ程御臺は高々。詞皇極天皇崩御ぞと。地呼ばはる聲にハアはつと。驚きながら平伏はフシ庭に涙ぞ溜りける。地色鎌足奥より靜々と。衣冠正しく立出て給ひ。詞仕丁の面々慥に開け。帝の崩御は入鹿が悪逆。天恩思ひ命を捨て。入鹿に刃向ふ心や否や。仰せに及ばず神國を奪ふ大魔王。天子の敵をなどか赦さん。オ、神妙々々。誠は是に皇極天皇御安泰なり。地色拜し申せと懸けたる御簾を引上ぐれば。天皇玉體恙なく。女官もかしづく有様に。各はつと二度悔りフシ悦び勇むばかりなり。地色鎌足猶も押鎮め。崩御と知らずは敵の聞え。其旨心得退出と。退け給ふ明智の程フシ感じ。入つてぞ入りにける。地色今までそれと名を呼びし。手負の女は苦しげに。詞父様母様。教への通りはかくなれとか。勿體ない此御衣を。脱して死して下されと。地聞くに堪らず御臺は騙寄り。詞コレ鎌足殿。娘が教を聞入れて。まんまと敵を欺騙つた。爲果せた出来したと。地一言褒美に云うていのと。ワツと泣出す母よりも。父は猶しも目をしばたき。詞一天の下君の子ならぬ者も無く。生の親より恩深し。其恩に返す命。惜しいと思ふな恩にも被ぬ。天皇を害せしと入鹿が思はゞ氣をゆるし。玉體恙あるまじと。父が計ひよく聞覚え。手籠に逢うても色目を包み。よう覺られず隠したな。地汝が命捨てし故。君の顔よく拜み。臨終せよとありければ。娘は這出て這寄つて。女は氏より玉の輿。我は天子の玉の冠。有難や冥加なや。此上は望みは無けれども。詞幼き時より許嫁。夫と定まる光成様。三日なりとも夫婦となり。二世の堅めがして死にたい。地嫁入してたゞ父上と。消ゆる命の望事。フシ哀れにも。又道理なる。地色天皇御聲掻き。朕が命に代る者。即ち四海の母たるべし。不徳の君に仕ふ故。世の憂哀れに逢ふ如く。思ふ心も恥かしく。御衣の袂を顔に當て。フシ歎かせ給ふぞ有難き。地色夫婦娘は三拜の中に御臺は猶涙。下萬民の者までも娘の悪性男の不義。戒め叱る親の身の。我は敵の手引して。閨の懸引盃の。酌に立ちしは何事ぞ。四海の母との綸言は。我子の譽れ身の冥加。有難うて悲しうて。泣くも返らぬ死出の道。誰が附添うて未來まで。送り届けん不慰やと。縋りては泣き立つては泣き。スエテ悶え

苦しむ有様に。地色天皇女官も諸共に。歎く涙は水晶を。フシ水に寫すが如くなり。地色鎌足公は天皇の歡應に恥ぢて涙を隠し。詞コリヤ娘藤照よ。母の歎きに必ず迷ふな。三千世界の涙より。君の一滴が好き土産。親の身では嬉しうて五臓六腑に徹へるぞや。地女は涙の足早く只一筋の桶の水。夫は義理で堰留むる。胸の苦しさ推量せよ。分けて娘は父親の。不慇懃なる者なれば。幾萬人でも一人でも。思ひは同じ思ひぞと。猛き心に。持つ涙押へかねてぞ見えにける。地色娘は苦しさ悲しさも。餘りてやう／＼起上り。詞なう母様。もう歎きを止めてたべ。天皇様も御覽覺。女官達も見て御座る。未練卑怯と笑はれて。お愛想の盡きぬ様。もう私はお先へ參る。父様母様お二人を。頼み上げます天皇様。地いづれもおさらばと。無常の風に誘はれて。フシ眠るが如く息絶えたり。地色母は勿論天皇女官。ワツと泣出す涙につれ。鎌足公も一時に。スエテ轉び。伏してぞ泣き給ふ。地勝手口より最前の使者。伴の主税之助。詞姫君御迎ひの刻限延引。誰そお取次頼みまし。御披露々々々とたける聲。地スハ人こそと玉座の御簾。さつと下し鎌足公。詞主税之助か。嚙待遠是へ／＼。地はつと立寄り手をつかへ。詞委細最前より承知仕る。皇極天皇崩御の事。驚入つて歎かはし。姫君は相違無う。お渡しなされ下されと。悔みを續めて平伏す。地御臺は聞くに猶悲しく。娘が此世を去りし事。知つて望むは胸怒と。フシ怨み唧ちて在します。詞鎌足公暫く思案し。ムウ次の間に控へ。娘が最期はよく存じつらん。二人となき娘強つて望むは汝しれ者。言分あらば云へ聞かんと。地御佩刀に手を懸けて。御氣色變つて見え給へば。主税之助膝立直し。詞やあら心得ぬ御上意。最前仕丁の面々へ。皇極天皇崩御ぞと仰せられしは偽りか。萬一世上の口變。天皇と取違へ。藤照姫を害せし故。縁組も變替と。沙汰あつては忠義は徒事。崩御なされしは天皇。姫君はソレ其處に。別れを惜しみ寝てさうな。否でも應でも受取つて。乗物引立て罷り歸る。サアお渡しなされいと。地知つても知らぬ空とぼけ。洗石の鎌足横手を打ち。詞志過分々々。息ある内に渡しなば言譯もあるべきが。體は朱に身は切れ／＼。あの姿を見て主税之助。夫婦が心推量せよ。前世の業とは云ひながら。地不惑にお

じやるとばかりにてフシ又御。涙にくれ給ふ。地色俱に涙を掻拭ひ御尤もなりさりながら。詞假令御身はひし醜。手足は離れ斷れても。二世と組んだる御夫婦。地せめては野邊の送りをば。地主人方にて取りまかなひ。別れを惜しませ申したし。詞一つは敵へ聞えの爲。嫁入の儀式祝言のまなび。地御了簡と涙にくれ。願ひ申せば實に尤々。詞娘が最期を隠すは天皇崩御の印。ソレ／＼娘が嫁入装束早く。地あつと御臺も涙に暮れ取りつくろひし祝言の。衣裳も白無垢亡者も白無垢。詞コレ／＼奥。色直しは要るまいと。地氣を付ける程悲しさの。猶も増える物思ひ。夫婦がまかなふ其中に。はや乗物に昇乗する。面影隠す綿帽子未來の爲にすんばうし。逆様事のとりおきは是も約束嫁入も約束。悲しき夫婦が身の上と。手に手を執つて冠のフシ朽つる。ばかりに泣き給ふ。地色主税之助故と聲張上げ。詞姫君の一世一度。御祝言のお嬉し涙。何時までも盡すまじ。地五日歸りは拙者がお供。はや乗物を立てませい。ない／＼と六尺奴。肩を揃へて昇上ぐる。待てよ／＼と取纏る。御臺を押へ鎌足公。詞須達が十徳も無常は止まらず。阿育が七寶に壽命は買はれず。地いづれか生者必滅の理りに洩れん。見るも夢覺むるも夢。夢とはいへど覺めやらぬ思ひの種を乗物に。乗せてしらすの花ばだけ。ナウこれ暫しと母親の。聲に止まる下部が足元。嫁入の儀式取りまかなふ主税之助も力無く。餘處への聞え高聲に。詞嫁入よ／＼。嫁入に附くも麻杜軒。地娑婆を去られて行くも白無垢。門火を焚て送り火に。關路を照らす冥途の道。跡脈しが直ぐに吊ひ。舅入をば一七日。母の土産は香焚物。聲の祝儀は娘の白骨。骨になるのか嫁入が。灰になるのか祝儀かと。夫婦が見下す。供は見上ぐる互の。涙。通ひ車のくるり。くるりと庭の繁みを昇いて廻れば。供に附添ふ親の身の。今が此世の別れと別れ。父が涙は人目を隠し。母の名残は涙で惜しみ。迎ひの武士は乗物へ。問はず語りも泣聲に。三つに隔たる雨霰雪や氷も。村雨も。一ツに流す芥川。堰留めかねてやう／＼と長柄の里へぞ歸りける。

第 四 道 行

世の中は。フシ月に叢雲。花に風。思ふに別れ思はぬにあゝうるさはの暮清草。水に繪を書く戀の淵。御痛はしや天皇は。めしもならはぬ旅の空。鎌足夫婦八王も。道より召連れ給ひつゝ。小オクリ夜半に。紛れて落ち給ふ。御有様こそ哀れなれ。昨日と暮れ今日と過ぎ。スエテ飛鳥の御所の御車も。引替へ今日は徒歩路の道。其頃しもは秋の田の荳穂の稻のちら／＼と。ちらめく星のかず／＼は。いふに。云はれぬ天の河。空にも戀があればこそ。四方に浮名は七夕のいとしをらしき。フシ夜這星。飛ぶ火の森の。木蔭に人目忍ぶの笠の内。世を厭ふ身はいと猶心。細井のはしづかこそ。崇神帝の御叔母君。もゝそ姫の御陵なり。長地雲井の上の雲思柳の糸のやなぎ本亂れ初めにし世を治め。何時かしとねの帶解川。フシ渡りくらべて今爰に。行くも山中。又行く道も。山中の。半仲峰に簪の音すれば谷に落來る水の音空。恐ろしや我身より。我身を責むる我心。ナホスフシ心留めそ。いそのかみ。急くとすれど。抄取らぬ。人目堤の奈良坂や。本フシ兒手柏の兩面。逢はでしのぶの篠薄。風に靡きてあちりナこちりナ。あちりこちりと吹いて落ちたか木のめ坂。杖に縋りてよろ／＼と。よろばひ給ふ御よそほひ。フシ勿體なくも恐れあり。地鎌足夫婦御手を執り。詞はや津の國も程近し。御心靜かに御歩行の道すがら。地今宵の月の冴えたるをも。觀瞻あり。興じさせ給はゞ。御心も晴れさせ給はんと申上ぐれば。天皇。稍打笑ませ給ひ。フシげにも今宵は。秋も最中の空清く。二千里の外に隈も無き。地月の入るさの山高く。大内山の山ならば歌を詠み詩を作り。フシ百官儀式華やかに。月見物見の管絃議。それには變り今日の今野に伏し月を見る事も浮世なりけりな／＼に問ふべき人も無かりしに。いたはり助くる人々の心をいかで報ぜんと。御衣を絞らせ給ひければ。御供の人々も。共に涙を催せり。詞八王御心を慰めんと。江戸外記アレ／＼。向ふの小松原。君の御幸を待顔に。山を隠して並木の松。是を味方の軍兵と名づけ。鑓て御

加勢雲霞の如く。日月の旗眞先に朝敵入鹿が館に押寄せつまり、に隠し勢追手。搦手押取巻き。四方より攻入らば何程猛き。猛將も。フシ弓折れ矢盡き。詮方無く。ナホス己れと自滅疑ひはし。吉左右よしや旅立も。よしや世の中

フシ世なりけり寄邊を分かぬ。道なれど暗がり峠打越えて難波の。葦の津の國や長柄の。里にぞ三熏、着き給ふ。

地津の國の土地は上品上生の。菩薩の種を植置きて今日は草取り水かきの。星戴いて霧拂ひ。土から土に入るまでと。一人の手にて作り出す岩次というて土地でも。小理窟いうて小分別あつても内は提燈の。日の目も射さぬ在家の。夫の留守に女房が出の口明けて針仕事。公儀袴の洗濯もつゞれ水うす茶呑み時。娘おこよが氣を付けて。地花香も丁度十六か七というても九にならぬ。ぼつとり者の手入らずは。フシ生れ長柄の里育ち。地色出花一つに母は手をやめ。詞オ、よう氣が付いたどれ。オ好い茶の花香。額に當てると頭痛もさめる。ヤおこよ。親父殿の留守の間其方に咄す事があるよう聞きや。知りやる通り以前の配偶岩次殿に別れてより。下作のとひもはなれあつて居る内。今の岩次殿は西國生れ縁でこそあれ此家へ入聲。白髪交りの縁結び恥しい祝言も。其方がやうく七つの年。僅かな作徳を力に今日まで暮す所に。今の王様入鹿殿とやらが。此村中へ壹萬貫といふ餘荷の吩咐。廳後に五兩とやら七兩とやら跡の月からの催促。地家齊家財を賣るもあり。田地を質に入るもあり村中が上を下。返す當なき無心も云はれず。難儀は此方の親仁殿其方や俺が苦にしかと。くろめる内に日が切れて。地毎日毎夜の催促というて金は無し。膝とも談合と概略を語れば娘も打情れ。詞ぼつと其事を聞いても知つても女の身。何處でどうする當も無く。地父様の顔ばつかりを眺めて居ますとばかりにて。フシ親子。案じの涙なり。地色又も来るは庄屋の徳助ぬつと入つてきよろ／＼と内を見廻す不興顔。親子驚き足は扱。詞人の内へ案内無し。地無遠慮とは云ひながらフシ好うぞお出でと機嫌取る。詞何云はるゝお内儀借金乞ひの案内と鮎のうは水足音聞くとすつ込み。何時來ても見付けれぬ親仁又留守ぢやの。生中親仁が御前にて理窟はつたて七兩壹歩。寵役に村中の難儀外は大方調うて。埒の明かぬは

是のばかり。段々延びて月越の日切。いはねど今日が願以此功德金次第の申し上げ。地埒が明かぬと直に水牢。有無の返事を僅た一口。フシきり／＼云はれとせりかゝる。詞成程お道理御尤。地違うて今晚明朝まで。お待ちなされて下されと云ふを打消し。詞ア云ふまい。御尤もお道理を涙であへてももう叶はぬ。是から直ぐに代官所。地太儀ながら牢の飯。宵から炊いて置かれいと。立つて行くを娘のおこよ立塞がりて手に縋り。詞父様の難儀私等親子の悲しみ。地思ひ遣つて下さんせ世には情もあるものと。抱留むれば庄屋はぐんにやり。詞美しい此方に留めらるゝと身が縮む。幾度來ても抱留められ。來しな腹立ちより去しに立つが迷惑。コレお袋明日まで屹度待ちましょ。岩次殿が戻つてなら。催促に來た事やうて下され。おむす去ばや。オ好い縋致と。地しなだるゝ。柳腰より弱腰を。フシふなつかしてぞ歸りける。地母は見送り目に涙おこよ。おこよと傍に呼寄せ。金に詰つて水牢させ泣いて居たとて益ない事。膝とも談合と最前に咄し懸けたは其方へ無心。詞有やうは一昨日寺參りを詫け。一日がけに江口町お傾城屋へ尋ねて行き。十六になる娘何程でござると問うたれば。賣ると買ふとて高下あり。六兩や七兩は鼻かけても直がある。地いふに大方談合しめ。今日見におじやる約束。義理堅い親仁殿。氣風聞いても邪魔になる。晝間時までおぢやれ行かう合點々々て歸りしが。詞親仁殿へは五七日西の宮の伯母女へ。留守に遣つたと紛かし末て知れたらまゝのかは。地親方さへ目に入らば奉公しよと思はぬか。秋が入つたら其金で。つい取戻すまでの事暫しの内親の爲に往てたもやいのと輕はづみ。膝し込むにも吞込むにも。胸の涙をせき隠す。フシ母の。心ぞ遺瀨なき。詞ア、母様の何のいな。私等が様な不束者お傾城とは餘り。舟引きとやら槍さしとやら前垂懸けの奉公でも。置いてくれてがあるならば何處へなりと參りましょ。地何奉公でも親の爲恥しい事ござんせぬ。有付の有るやうに神棚へお神酒をと。悲しさ隠す君傾城。明日から太夫天神の。フシ神も哀れと思すらん。詞オ、出來さう思やるが身の冥加。地我も他力本願を頼むと云うて一間なる。持佛の陰へそろ／＼と。フシ泣きに立つこそ哀れなれ。地色娘おこよは泣く涙袖に隠

して目を拂ひ。身を浮舟の流れとは多くの人に肌觸れて。酒と情を賣ると聞くごんすやんすの詞付き。口舌とやら曰くとやら。誰に習うて明日よりも憂勤めすることぞ。田舎育ちの田夫者せて風俗品貌。繕ふ術でも知りたやと。スエテ獨り啣ちて居たりしが。詞ハア、それよく。日外村の友達と紋日とやらに道中を。見物したはこんな時。地役に立てよと神の告。人の來ぬ間に稽古せう太夫の道中揚屋入。こんなものかと小棲取り。鷺の鱧の八文字。眞一文字も蟹の横。河豚の横飛び猿走り。歩むとすれど深足。フシ可笑くも又哀れなり。地色一間の母は障子越し差覗いてはちやと引き。引いては覗く親の心悲しさ辛さ身の因果。地獄の種に實が入つて胸でこなする血の涙。つき込みく呑込む辛さ。城りかねて一時にスエテわつとばかりに泣沈む。地色こは何故と驚く娘。抱起すれば縋り付き。詞可愛の者の心やな。親の爲とて聞入れて。其身に染る里稽古。地子を賣る親が安閑と障子の陰で見物は。人食ふ鬼も得せぬ業。如何に貧苦に逼ればとて。かくまで逼るものかいのと。抱緊め抱緊めて聲も。惜まず泣きければ。地色娘は涙を猶隠し愚の母の仰せやな。詞山家の櫻は陰に朽ち。都の花は歌に詠む。わしや傾城が嬉しいと。地口と心は二重三重。八重の櫻の散々に。オクリ別れを惜む涙なり。地色折節來る傾城屋。岩次殿とやらは此方か。お内儀はお内にかと。暖簾引明け。詞エ爰ぢや。江口の里の花巻屋。地見知つてあらうのと。内へ通れば。ようこそお出でと泣く目を隠し。程ある所を御苦勞と。母が挨拶是は痛み入る。詞商賈づくは百里でも飛びまする。シテ咄しの娘御は是か。したり好い纏致。ても扱てもこりや悔り。十兩足らずの端物。物にならずとけあなどり掻いながりの相談。本年ならば五十兩。太儀しやお袋どうぞ談合なるまいか。さあ其處が氣の毒。親仁殿に隠し。當分預けの年二年。地短うて厭ならば。外へ談合とはね袴。仕立てかればこりや待つた。地手きくの娘で猶望み。突出し二年七兩壹歩。金拵へて持つて來た。受取つてと投出し。手形は吉日娘御が證文。地垂水の茶屋に駕籠もあり。親父殿の留守の内。速立つて去ましょと身拵する所に。向の畦の細道を。ぶら／＼歸るは父の岩次。娘見付けて。詞アレ母様。父様が見えますする。

ドリヤ〜。ほんに大きなけど。地今やつては事の破れ。垂水まで首尾見合せ。跡から私が連れて行く。先で待つて下されと。如才無き體見て取る粹顔。天窓から隠す親父。首尾ならねは氣の毒。手具合ひして跡からと。フシ色屋は先へ出て行く。地色長柄村岩次兵衛と土地でも。人に知られた瘦親父。歟の柄先に雉子一羽ぶらり〜の拾物。年は六十はち巻に。弱みを見せぬ堅ものは。フシ昔者として持囃す。地色女房ちやくと針仕事。娘は釜の下地から。するわざ見せるさいかくを。何の氣もなく内に入り。調娘戻つたぞよ。地えい〜とあがるお上に雉子一羽。投出す足の膝まくり。調コレ喚。針仕事置きやいの。又目が悪なる。娘釜の下焚いて大黒になるなよ。デエ息繼に茶一ツと。地常の機嫌に此方もほれ〜。公儀ことが多い故務に繼して置きます。調もう破れたか。今朝から庄屋のぬつくりは見えなんだか。来たとも〜。金が濟まぬと水牢と。きつしくな催促。白痴者めが。さう云うて和御女達囃すのぢや。誠にすなよ娘。怖い事もなにも無い。水牢は舟遊びよりやつと樂な。王殿が逆鱗ばつても。神武此降無い物取るが何處にある。案じる事は些とも無いと。地色口は達者に云ひながら。奥齒に挟むかねごとは。フシ鐵に鐵をぞ寄にける。地色娘おこよ聞くに悲しく。調村中が調うて此方ばかりとの口上。幸ひ西の宮の伯母様。夷子講の懸錢急な事なら云うて来いと。常々の内證私が云へばつゝい埒する。地秋が入つたらほうをつゝら。間を合はす爲往きましよかと。江口の町を西の宮。伯母に擬へて身の代の。フシ金の出口ぞ哀れる。調置きや〜要らぬ物。隣國他國は云ふに及ばず。在々村々未進の催促。伯母女の邊りも此方同然。ア、まゝよまゝの川。一度死んで二度死ぬまい。王でも頭でも去がけの駄賃。死損なうてさか高にはいつた此親父。金銀故に王の座で詰めらるゝ覺悟。案じな悔むな天道が正直。地どうなとなるぞと苦にさせぬ。親の心の慈悲深く。餘處見する目に一包。調喚其包んだ物は何ぞ。地是かと取つた七兩壹歩。忘れ置いたか南無三寶。覺られては當座の都合。調隣の婆様が寺参りの土産。焼饅頭僅た一ツ。地音い人ぢやと紛らかし膝に隠せば。調テモ拟も慾な目からは悉皆小判。地よう似た物と打笑ひ。さらば我等も土産物。少分なが

らと雉子取出し。調仕合せが直らう端か。思ひがけも無い此鳥。下り松の砂山足元でけん／＼と吠えるを見れば薄中。鉄のかまちで僅た一打ち。ころりが物は捨てゝもある。地まん直しに酒買うて焼鳥で一盃しよ。一升買うておぢやらぬか。調仕舞仕事の手がとまる。ソレおこよ。太儀ながら往ておぢやと。云ふに親父がア、不精ばかり。若い者が徳利提げ。他處目が悪い見苦しい。地六つかしくば置きや／＼と。無機嫌顔を見るも氣の毒。調そんなら我が往きましょ。地ま一つぎで縫了ひ。其間に料理と組板を娘が直し毛を撈る。まだ暖かな鳥の肌。可愛や己が己でに。泣いて取らるゝうつけ鳥。鳥を驚と争うて。命助かる者もあり。小網に罹り餌にさゝれ。定業非業の死をするは人間とても變らずと。思へば羽も撈りかね涙。フシかぞへるばかりなり。地色岩次は何の氣も付かず。調是は扱鼻まだ往きやらぬか。臂の重たいわる俺なと往こかとせり立てられ。おつとまかせと立上り。調コリヤおこよ。此袴疊むなら。地折目高にと云ひさして。フシ徳利ひつ提げ出て行く。地色跡には親父が切刻み。娘が重なる羽の數。十ツゝ六ツは六十の。八に當りし年男。二人連れにて驅來り。調岩次殿お宿にか。代官殿から急の御用。地お出てあれと呼出つる疵持つ足の悔りに。娘も狼狽き最前の金の咎て水牢か。母様呼びに走らうか。どうかかうかと氣を跪く。岩次表に走出て。見ればいつもの寺講中。調七九殿左次殿。代官殿より呼出しとは。金の事なら病氣々々。いや／＼驚く事でもなし。又驚かぬ筋でもなし。變つた事のお尋ね。六十八の年の者村中を詮議して。残らず連れて來いとある。善か悪かは知らねども此方共に八人。病氣ならば戸板と念が入つて急のお召。調何れもあれに待合はす。袴羽織を引懸けて。いざいざ御座れと云ふに付き。調先づそれならば外の事。雉子の料理で飲みかけた。底入れてござらぬか。いや酒どころじやござらぬ。物案じて咽喉が通らぬ。皆も待遠さあ／＼ちやつと。地早う／＼のせり立に。在合ふ袴踏みしだき。紐の長みをかい挟み。娘があてゐる腰板も。横になる程せき立てば。調コレ父様。年寄つての物急ぎ。地怪俄の基と氣を付ける。調いや／＼ぶち驚きの無い悪い。善悪知れぬお上の事。聞くまでは落着かぬ。うろ／＼せずと留守よう

しゃ。内明けな。地雉子を猫に取られなと。急ぎ馳出す二足三足。行くと轉たるあいたしこ。なう悲しやとおこよが
 飛出で。抱起すれば顔眺め。詞娘どうやら往きともない。地囃はまだかと問ふ不思議。こな親父はと兩人が。引立て
 行けば取纏る。娘の手先引放し。突倒し行く親と子の別れは。後と三重知られたり。地郷に入つては郷に隨ふ世の例。
 石川三位光成卿都を離れ攝津の國。長柄近在二里三里一家の好みに赦されて。色慾強き入鹿の下知受けて流する
 川端に。屋敷構へる代官所。執權伴の主税之助上の仰せを眞直に。勞る下も自ら。繩取りよりも太刀取の。フシ役
 目も辛く座に直る。地色筆紙取次關所役元締役もそれ〴〵に。何村の何兵衛未進の勘定算盤も。歸一倍々割りかける
 主の見一無たうの捌何れ。是非なく見えにける。地色郷手代帳面改め。詞近在は残らず上納銀相調ひ。此長柄村に七
 兩壹步竈一軒の不足。如何仕らんと伺へば。主税之助頭を痛め。少々儀は尋ねに及ばず。家財田畠に離れ差上
 ぐる金銀。土地盛んなりとて當地に建てられる禁裡普請。成就とも思はず主人光成卿お心弱く。萬民の歎きお耳に
 入るゝも氣の毒。引つ取つて某が御名代。先帝の御代にならば此百倍にて戻す思案。地色武烈王以來の入鹿。天の責め
 近きにあり。詞と云うて當前下の歎き。其方達も大概は見遁し。山開深田に竿入るゝ事無用。地色泥水はすゝるとも
 山水清河に心を清め。必ず上を見習ふなど。心は仁義禮智信。五字の掟も自から。フシ川の水屑となりける。地色取
 次の諸太夫一ツの箱を忝しく上座に直し。詞入鹿大王よりの繪旨。主人光成卿へ差上げし所。貴公に頂戴あれとの
 御意。御拜見と控ゆれば。主税之助打領き。尤も繪旨院宣の頂戴には。其儀式ありと雖も。地色大惡強敵の入鹿民家の
 訴へも同然。光成卿手に觸れ給はぬも尤々。貴殿披いて見られよ。と云ふに隨ひ讀立つる。詞謹而頂戴あるべき一
 書。長柄村の橋先達て申遣はし候通り。人柱を以て成就致さるべく候。一つ鎌足の大臣都を開き津の國へ立越え候よ
 し。其近郷見付け次第。首討つて送らるべく候。其方大王の好みあるを以て。其地に差置かれ候君恩。有難く存じ奉
 るべし。者執達件の如し。三位光成へ右大臣。縣の押照判と讀了る。地色主税之助えせ笑ひ。詞俄公家の右大臣。

繪旨の文章も獨次。先帝崩御と心得。鎌足公ばかりを書載せしは重疊々々。地必ず此家に御座の儀。神文の通り齒節へも出さば。部類を絶す合點か。よきに勅答とかす公家を逐返せ。仔細聞くまで落付かぬ都の使。是で胸さつばり。詞々今朝申付けし當村の百姓。六十八の者人數揃はゞ是へ通せと。地仰せに依つて呼出す。木まぶりの頃の老の年眼鏡で道を歩むもあり。耳の遠いは口先で動きにつれる二重腰。疝氣のくわりやうだいを五十六七十に。二ツ足らぬを擇出され。せう事なしの蟲くひば伊丹。邊から此村へ隠居しに來て死に來て。閻魔の前の問事は何の事やら白髪の揃へ。雪をまいたる川端の。白砂に畏り。フシ上意。如何と躊躇まる。地主税の助人數を見廻し。詞村中に六十八の者は是ばかりか。つゝと寄れ苦しいない。云渡す事ありと。地色其身も端近く差寄り。詞當村長柄川の儀。水逆立つて矢の射る如く。渡しの自由さへ心に任せず。此度内裡を建らるゝにつき。橋無うては叶はじと。千度百度架けかかれども。夜の間にながれ成就せず。其通り入鹿大王へ申上げし處。禁庭にても評議様々。天文の博士奏聞して曰く。是水神の咎。水は陰なり男は陽なり。六十八は癸の亥。十干十二支共に水。水に水を合はすれば。同氣相求むる道理。陰陽合體すれば橋成就疑ひ無しと。博士が申すに隨ひ。急ぎ六十八の男。人柱に入れよと入鹿大王の勅諭。汝等は六十八癸の亥。相詰めし内。地色一人命を取るぞと。聞くより惻り。詞エ、思ひ寄らずこりやとうちや。寢耳に槍か泥龜の。地餌食にせうとは情ない。こりや云譯をと出る男。詞私は六十八でも大晦日の夜半生。やうくと一時を一年。よう思へば六十七。地しちと云へば流れは嫌ひ。水のかみも大きな禁物。札付は御赦免と。願ふ内より這出づる。詞私は九と申す申譯。其仔細は。閨が丁度廿月。八といふたは何ぞ又。御褒美でも出ようかと。少しの慾に迷ひひと。地知れぬ命はお赦しと胡亂な事を仲間同士。詞其云譯は暗い。拙者は屹度證據人確かな事とつゝと出て。我等が親父は粗相者。節分の夜を取違へ。煤掃の夜豆打。それより一ツ二ツづつ年まめが違ひ出し。七十やら八十やら。委しき事は舊冬の。地厄拂にお尋ねとたわいやくしたい役所の正面申し上げます。詞身どもは當年六十六。見かけ

より二ツ程老けたと云うて八仲間。さすと引くとて名も七九。八々はらふ占に。地色ま一度お尋ね下されと。應ふ所へ。又一人。詞某母の胎内をぬつと出たのが戌の年。正月餅も大と小。地搗違うたがよいならば。臍の緒吟味下されと。眞顔も時の出合口。或は七十内外の八のあたりを撫廻し。口重たきはうぢ／＼と。腹を捻りて居たりける。地主税之助氣を痛め。詞命助からんとて様々の云譯。地無理と思はず。フシさりながら。地色老少不定の世の例。今日助かりて明日の日の。無常菩提の催促は何と云拔け成るべきぞ。詞さすがは凡心愚痴の至り。地如何様に陳じて一人の命は遁れず。前世の業と諦め。覺悟せよとありければ。わつとばかり一時に。庭に倒れて泣く涙。フシ川も水増すばかりなり。地色主税も涙を浮めながら。嗚や妻子眷屬が歎きも思ひ遣られたり。詞何れにもせよ。人柱に立つ者の命金銀にて買ひ受け。残る妻子の糧とせん。地色せめてそれを力と思ひ潔く望み出で。命を捨てよと仰せを聞くより皆一同に詞を揃へ。詞金銀にて買ふ程なら。入鹿主でもあり様でも。サア買ひませう賣らつしやれ。地色世に大切な物なりやこそ邪非道の掟をも。守るは命が惜しいから。聞分けてたべお代官。お役人様／＼と。手を合はせしは罪人のフシ責を。詫する如くなり。地返答に持ちあぐみ如何と躊躇ふ其中にも。聞分ある岩次兵衛。物中に立出て。詞取締もなき方々。残らず命を捨つるでなし。一人とあるからは定つた上のお詫。何かと云うて叶はぬ事。地色歎きを止め思案あれと。云ふにちつとは力を得。詞お云やればそれもさう。どれがどう成らうやら。闇の夜の礫中つた者が因果。地色どれなとお指圖受けましよと。云ふも猶々支配の迷惑。どれと名指しも蟲眞もならず。ハテどうがなと差俯向き。思案の胸を砕けども。何といひ出す事も無く。フシ案じ餘りて見えにける。地色岩次見かねて進み出で。詞某當在所へ入聲に參りしは十年以前。生國讃州志渡の浦海上を商賣し。鱧鰐に見入らるゝ事度々。多くの乗合の内。孰か見入れられたるとも知れず。地其時は桟折敷扇當笠の類。各自が印を付け海へ打込み。其取られたる者を。餌食となす眞ッ其如く。詞人柱も水神の見入れ。各自の物は是なる河へ投入れ。假令渦に巻込まれうが。又は自然と沈まうが。

其主を捉へ人柱となし給はゞ。恨みの筋も候まじ。地此儀如何と伺へば主税之助。横手を打つて奇妙々々。詞奇體の教へを受けて胸を開く。残る者どもあの通りに。違背あるまじやと尋ねれば。何が扱て此上は互の運づく。地色思案の深い岩次殿其色品は持合はさぬ。とてももの事に何はめう。それも序に案んじてと。こだねあつらへ身の程の。フシ助かるやうに頼みける。詞いかさま小道具在合はさず。何れも着する袴。地惜しくとそれをと指圖に任せ。何の惜しい事がある命の代りぢや脱ぎまじよと。手ん手に紐解く結び解く親の代から洗はぬど。洗濯致して歸らうと縁喜祝ひの麻袴。拙者は小紋輪違ひを思ひ違ひのないやうと。心を籠めて差出す。我等は眞黒烏色。烏は權現つかはしめ。力を添へてと手を合はす。其外茶小紋水淺黄。紐の切れたを目印に板の無いのを證據にと。並べる内に岩次が袴。麻黄小紋の同じ色。紛らはしいがオ、それよ。袴の襦につき一ツ。是が目當と差上げる。時の役人立出で。攝集め引抱へ川端近く差寄れば。主税之助立上り。詞今が一生懸命生死の境。地色必ず跡で争ふなど。流れにひろげ一ツ入れ。二ツも過ぎて三ツ五ツ。流るゝ袴の主は悦び。浮く人々は飛上り川の面に目を離さず。六ツ目も浮み情なや八ツ目の岩次がつぎ袴。はめるや否やぶくく。詞ヤア悲しや南無三寶。ありや取れたは沈んだは。地見入られたるは岩次ぢやと。口々云はれ我も又。川の面を差覗き上へ走り下へ行き。尋ね廻れど水の面。其色影の見えざれば。ワツとばかりにどうと伏し。スエテとかうの。詞涙より。フシ尋ねる外は無かりける。地色残りはいそぐきく。悔みの詞足も空。オクリ勇みへざゝめき。フシ立歸る。地色主税も不慙と思へどもわざと聲を荒らげ。詞ヤアおくれたるか岩次。汝が教への通り蟲履も無し依怙も無し。恨みの歎きか。悔みの涙か。地卑怯至極ときめ付けられハツとばかりに顔押隠し。詞かくならう端にや。家を出る折柄石に躓き伏したるを。娘が飛出て早速介抱。其時娘が顔見るより。後髪が引かされ一足も動かれず。誘ひの兩人に引立てられ。參るや否や人柱の吩咐。其時の事はや忘れ。小ざし出て要らぬ裁脚。思へば前兆であつたよな。妻子が儀を頼み上げます。地路頭に立たぬ様お慈悲の恵みと手を合せ。佛を拜する

如くにて フシ涙に。暮れて居たりける。地色狭き在所は知れ易く。かくと聞くより女房娘。徒歩跣足にて驅來り。詞嬢しや爰に變らずか。巨細は聞かぬど人柱と。地聞いて驚き騙付けた。此方一人は殺さぬぞ。死なば親子三人連。怖い事も何ともないと。脹張懸けて女房。詞コレ代官殿。六十八の者人柱は是非ないが。數多ある中親父殿只一人。擒にしたは何事ぞ。科あつてか但しは意趣か。地其譯聞かうサア聞かう。詞才母様それ。好い聞所問所。父様ばかりが亥の年か。お代官づら返答しや。地云はぬと咬着く撈着く。どうぢや。と兩方より。親子があせる心を感じ。詞ヤレ氣を鎮めよ兩人。様子知らねば恨み尤も。意趣も無し科も無し。せかずと仔細篇と聞け。人柱に入るゝ者以上八人。其中にて彼か是かと評議區々。岩次が才覺を以て各自が袴。印を付けて河へ投込み。其沈んだるを人柱と定め。何れも河へ流せし所。其方が親父岩次が袴。水にうつす。其儘沈んだる因果。委細は岩次に問へ。と。地云へども女房せき上げ。詞其筈ぢや其袴は沈む筈。ヤイ狼狽者。袴だ水に沈む筈とは。コレ其袴の襠には。つぎが當てゝあらうがの。成程々々其つぎが目當。地なう其つぎの中にこそ。親父殿に隠す金。七兩一步入れ置いた。ヒヤア。ヤア。地と云うても聞いても詮なきながら。岩次は這寄り摺寄りて。詞コリヤ女房。粗相云ふな偽るな。一粒一錢の貯へ無く未進に逼る某。其方が金とある筈なし。地仔細はどうぢやと云はれて女房。又改めて聲涙。詞成程合點の往かぬ筈。竈役の金餘り切なく。水牢といふ悲しさ。娘を江口町へ賣る筈にて受取つた金。見付けられじとつぎの内。地隠し入れたは正眞の。此方を殺す双金か出双か。情ない事しましたとわつとばかりに。泣沈む。地色岩次はまつくろ氣はいらだて。女房取つて膝に引敷き。詞ヤイ女め。娘を賣る事誰に斷つておのれが差配。先夫の遺子。種は蔭かねど身とも。親子。娘の蔭で榮耀すりや。今此身にはならぬはやい。某以前はめかきの戸次とて。讃州志渡の浦にて。面問不背の玉を取返せし。満月といつし海士が親。一廉の恩賞をも貰はぬはな。娘を先立てた業人。榮耀して何外聞。尋ねに逢はぬ内國を立退き。地此里の土氏となつたは。子供の恩を受けまい爲。詞可愛さうに菅の花をたらし込み。傾城奉公

とは。おのれは娘が可愛うないか。おりや身に代へても彼が不惑な。榮耀えとくに育てたら。冥途で先の親ごぜに。禮も受けう自慢もいほう。娘賣つた其金で。未進遁れて來ましたと。どう面出して父御に逢はうぞ。地女の鼻の先智惠で。夫を水のすもりにするが本望か願ひかと。叩いては泣き泣いては打ち。かう云うても人柱は。おりや遁れぬとどうと伏し。恨み歎けば傍に立つ。主税之助も堪りかね。障子の内へ暫くは。オクリ涙隠しに。フシ入りにける。地娘は悲しさ母に執着き。父様のお腹立て尤とは云ひながら。水牢に嚇されて。母様より自からが江口町へ身を賣りし。料は私母様に。恨み残して下さるなと。詫びこがるれば。詞オ、さうもあらう。孝行な其方。親となり子となりいかい世話になりました。何れ因果といふものは。水といふ字の暖簾にて。首を縊りし其例。娘の海士も水に死に。我も水に縁深く。水牢遁れた其金で。地又水に入る因果さは思へば水は我に毒水。フシ未來も氷の地獄ぞや。地色海士の手業は幾萬とも。鱗くずを取集め世渡りにせし其報い。親子共に魚の餌食。是殺生の好い手本。詞必ず佛經の吊ひより。一匹一合の鱗くずなりとも。助けて放すが經陀羅尼。地必ず娘忘れなと。因果の道理を辨へて。フシ云置く。事ぞ哀れなる。地色折柄來る傾城屋。手の者連れて押取卷き。詞ヤア大騙の不敵女。娘をつれてよう來たな。金戻すか娘を渡すか。無體に引立て行かうかと。地色理を理につる無得心。母は起立ち手をつかへ。詞其金は水に入り。娘も今では渡されず。家財残らず賣代なし。地受取つて下されと。詫びるを聞かずヤア成らぬ。詞金が無くば此娘と。地引立てるを母騙寄り。傾城屋が腰の物抜くより早く我と我が。咽喉にぐつと突立つる。是はと驚く戀屋主従。娘も夫も狂氣の如く。こは何故の自害ぞや。父母二人私一人。何故手に懸けて給はらぬ。二人一緒に死にたいと。くどき歎けば岩次も縁言。詞最前の打擲を無念に思ひ死ぬるのか。面當か女房。地おことが死んで此娘。どうならうと思ふぞと。抱起せば苦しげに。夫の杖は稻のきね。一皮内は眞實の菩薩の行で。フシ有難し。地色娘が爲にする自害。お傾城屋へ申譯。近う寄つて聞いてたべ。詞夫の爲とて娘をば。賣つたる金が水の泡。却つて夫の害となる。かうならうとは夢

にも知らず。江口町へ尋ね行き。親の口から傾城に。子を賣りませうというた時。地安い高いのをり極め。鬼でも泣かねばならぬ事。せき来る涙を吞込んで。七兩一步の身の代は。榮耀にせうか伊達にならうか。親父殿の水牢を。助けうぞ救はうぞ。金は寶と思ひしに。敵となつて人柱。やつぱり思へば水牢が。増してあつたに。フシ情なや。地色悲しみに悲しみ重ね。娘を此方へ渡しては夫が冥途の迷ひとなる。詞爰を思うてする自害。盗人の老嫗女。大騙めを殺したと。思うて腹を撫て下され。夫も我故。娘も我故。地此方へまでかたりして。是が死なずに居られうか。腹が立つなら寸々に。刻んで去んで下されと。掻集めたる身の科を。聞いて泣出す娘のおこよ。夫も始終取纏り。慾に目の無い轡屋も。心の手綱緩みしか。フシ馬の脊をこす涙なり。地色主税之助奥より立出て。詞ヤア／＼岩次。歎きは何時までも變らず。制法の時移る。急ぎ最期の用意々々。用意と申して纏懸るより外は無し。地色御勝手次第と手を廻せば。傍屋へ連れて行く雜人。繩と竹との巻き支度。手負の母は伸上り。いたはる娘も立上り。見て泣きあせる鶴の子の。親を慕へば慕はれて。見る影も無き姿形。思ひ續けて。フシ泣くばかり。地色心強き傾城屋。物にならずと立寄つて。詞さあ／＼お内儀。娘と金との出入り仕舞ひ付けよとせりかゝる。地主税之助懷中より金一包み取出し。娘が身の代受取れと。眉間目當に小判の手裡劍。直に戴く手足の早業。旦那露かと輕口も。フシ逸散にこそ逃歸る。斯くの通りと引出す。岩次が體を贅巻の依物。娘も母も二目とも。見るに甲斐なき親子の別れ。母は血汐を繰出し繰出し。娘。親父殿のあの姿は。此世の乞食冥途の餓鬼道。我此姿は修羅の猛火。赤いか／＼。赤いが直に火の車引けや。引けやと引く息の。フシ弱るにつれて憂別れ。地なう母様と執着いて泣くも敢なき最期の體。見る父親は氣も消え／＼。詞泣くな娘もう叶はぬぞ。父も今行く去らばぞよ。今日歸るさに雉子打つて。薦に包みし如く。此姿を見よ目干の簀も。雉子の鳴音で打たれたも。我と我でに言出して。袴の襦のつき柱。思へば雉子が知らせたか。雉子も口故。我も口故。地あの水底が我棲家。父戀しくば水をゝぎ。母戀しくば此土で。佛の像を供養せよ。父も無く。

母も無く。肩身かたみのすばむを見るやうな。可愛かたひの者や不慍ふげんやと。陸行りくぎやう寄り這寄りて。歎く涙の。長柄川ながへがわフシ蛇籠じいかごも。水に浸ひたすらん。はや引立つる。老の身おいを。見るに悲しく娘のおこよ。我をも共に通行つうぎやうけと。縋すがれば拂ふ露の間も。離れじなうと呼ぶ聲も。娘さらばと云ふ聲も次第に。遠き水の音。おこよはワツと泣倒れ。性根しやうこん正體無かりしが思ひ廻して手を合せ。南無父尊靈母聖靈なむふそんりやうもせいりやう。即身即是成佛そくしんそくぜふつの。回向みかうに供ふ一首の歌。物いはじ。父は長柄の人柱。雉子も鳴かずば打たれまじものを。云うたが大事か。云はぬが云ふに勝るかと。彼方あなたへ走り此方こなたへ行き。一ツ二ツの石の數共に長柄の水の泡。後れはせじと身を堅め。飛び入らんとする所に。詞ヤレ待て女暫くと。地留ぢぢうめ出づる貴人の相さう。何人なるぞ構うなと又驅出づるを拘留ぢぢうめ。詞汝今死ぬる命。入鹿に近寄り一太刀討つて父に手向けよ。今此歎きは彼が業わざ。心得たるかとありければ。女の力に思ひも寄らず。そもや如何なる御方にて左様には宣ふぞ。オ我こそは鎌足かみその大臣。帝諸共此家に忍ぶ。今汝が詠よぜし歌。君觀感きんかん淺からず。侍從の官を下され御はしに召されんとの觀慮かんりょ。地是へ出御と仰せの内。天皇光成主税之助。御臺みだいも共に立出でて。孝心歌道しやうしんかどうの御賞美ごしょうびあり。地色鎌足錦の袋より一ツの鎌を取出し詞入鹿を討つには神通力じんつうりき。汝に與へ諸共に力となつて討たせんと。地仰せは身にも冥加みやがにも餘りてハツと押戴おしき。諸天晝夜のものとなへ。歎きを忘れ勇みの小躍こぎやく我賤わせんくも土民の家に生るゝとも。今日侍從の官の戴おき。入鹿が館へ密に忍び。親を沈めし恨みの双ふた。神變不思議の鎌の名作めいさく。女と思はゞあての土鎌。草刈鎌くさかりかみのひら／＼。閃く臣下はおやすの公家達きやうけだち。爰に難立なんたてて。フシ彼處かこにかり立て。地色青かり衣きぬの青草あおくさ若わかばへ。實ばえも今は敵のすゑば。詞赦して置かぬでござんすでやんす。我等もちつくり色がま双がま。地ふすめの床の油斷を見付け。ふつてかゝるはお首の無心むしん。在所生れのおこよが仕懸しかけ。心の下紐したひもしつかと緊め。締めてくひ入るくさり鎌。鎌の威徳ゐとくは我等がおとく。はやお暇いとまと平伏へいふくに。心も勇む鎌足光成。主税之助も力足御臺ちからあしも君の御覚え。目出たく御代にかへり花盛はなもりも。長く長柄川ながへがわ語り傳へて人柱ひとしらきじなは。手とぞ傳へける。

第 五

地強惡^{ぢやうあく}の人は天是^{てんぜ}を抑^{おさ}へ。奢盛^{せきぜう}んなれば亡ぶるに近し。入鹿の大臣都を津の國長柄に移し。人柱を以て橋成就し。民の金銀取集め新に建つる禁裡^{きんぢり}の結構。川の流れを庭に取り。橋も築地の内構へ前代。フシ未聞の奢なり。地色石川三位光成卿執權主税之助を召連れ。毎日毎夜の出仕隙なく。時の權威は免れず。廣庭過ぐる向うより縣の押照羽黒の嵯峨丸。左右の翼の横柄顔。詞ヤア／＼光成卿。睨まれるが怖さに未明の参内よい合點。入鹿公の一家でも。鼻が高いと睨み落す。昨日も大王の御眼力で。金瓦が五枚忽ち湯となる。押照公の目先に烏が三羽。某が雀十羽。燒鳥には事缺かぬ。地自分が宿へも折々は見舞召されと舌長に。いへども光成猶まき舌。詞御惡意忝し。扱先達て申し上げし難波女の歌舞。蘆荳^{あしけ}の業のしをらしさ。今日御觀覽に供へんと。車宿りまで召しつれ参内。地宜しくお執成と手をつけば。詞ムウ其儀は君にもお待兼。奇特にも氣が付いて太儀々々。取次しておません。難波女が舞歌ひ聞いて睨んでくれんと。地色禁裡にはやる睨みの勝負。かけも構はぬ者までも。フシ滅多に睨み入りにける。地色光成卿四邊を見廻し。詞コリヤ／＼主税之助。豫ての望みは今日。何れも忍ひの用意は可いか。成程手合仕り。合語問言しらせの筈。支度宜しく候と申す。ムウ重疊隱密々々と。地主従心をフシ合はす折柄。地色入鹿大王出御と相見え。奥に聞ゆる管絃の調子。四方見晴す御殿を開き。生れ付いたる癡徒の乙聲。詞ヤ光成。汝と鎌足とは筆剪の縁あれば。心ゆるさずさりながら。勸むるもの見物せずんば。恐るゝといふも奇怪。皇極帝を殺し跡に立つべき太子も無く。敵對すべきは鎌足一人。彼が力に何と及ばん。假令朕を狙ふ者にもせよ。手強き性根の者猶面白い。急いで呼出し。脚腰の折れる程。フシ舞うて見せよと憎ざげなる。地はつとばかりに光成卿ソレ／＼主税之助。難波女皆實御目通りへ呼出せと。仰せに隨ひ差し心得フシ表へかくと知らせ行く。地フシ召しに任せて。立出づる。供のわつばが薄墨。面を作る品

作る。一荷の声をゆつすりと。肩も初もしるわりと。目通り近くどつかと卸し。フシ許して貰はと思をする。地色蛭
 峨丸押照詞を揃へ。詞ヤイ／＼下郎め。大王の御前近く見苦しき雜物。持つて下れときめ付くる。いや／＼是は商賣
 物。芦荻る業を御目に懸くれば。即ち是が飾り物。見苦しくと御免々々。さあ／＼女歌ひかけて舞ひ出せ／＼。地あ
 つと答へて賤の女の扇にことを。寄せにける。謠名にし負ふ。難波の浦の濱風に。揉まれて育つ芦の葉を。ナホスフシ
 いで／＼刈りて參らせん。げにや歌にも難波津に。咲くやこの花。冬籠り。今を春邊と匂ひしも。ステテ芦の葉草の露
 の玉。心を磨く種ならば。人に見せばや津の國の。小オクリ長柄わたりの春景色。舟漕渡る蜚小舟。フシかたはの芦に。
 棹さして。波に揺るゝ風情とは。本フシ大宮人も詠。じけん。きくには霜のおきな草。フシからよもぎとは誰が云ひ
 し。ステテ秋の薄の穂にいでて。尾花と云ふも理りや。人はともいへ我爲に。長地此水底は父の里往來の人のあしの
 にはかゝり給ふは悲しやと。思はず橋に立寄りしが。放下僧二上りあら面白の。水の流れや。筆に書くとも盡すまじ。東
 には八幡山崎。長柄堤を廻らば廻れ。ナホスフシ忘れたりとよ。放下僧餘處の見る前恐ろし。恐ろしの君の目元は。水
 車の輪の如く。河水はあしに揉まるゝ。ふくら雀が。ばつと辰巳の里よりも。舟に連立つ磯千鳥。三ツりはんま千鳥
 の友呼ぶ聲は。ちりやちり／＼。ちり／＼やちり／＼とちりとぶ所を。ナホスさいて取つたはあれ／＼。これ／＼此
 里の。たみのゝ島は憎からで。フシ憎むははしの渡しぞや。三津の濱邊に立つ煙。釣する蜚の漁火か。お手うち違ふ
 手枕に。心もよしやあし引の山路は遠く。海近くあれ佳吉の。フシ浦ぞかし。津の國の難波の。春は夢なれや。芦の
 枯葉に風防ぐ。匂ひおこせよ梅の花笠。縫ふてふ鳥の翼には。かさゝぎも有明の月の。かさに袖さすは。謡天津乙女
 のきぬ笠。それは乙女是は又。難波女の。／＼。かづく袖がさ肘がさの。雨のあしべの亂るゝかたを波彼方へざらり
 此方へざらり。ざらり／＼ざらり／＼と。風の上げたる古簾つれ／＼もなき心おもしろ。ナホスフシおもしろや。荻
 の上風。水に逆立ちざわ／＼と澤の蘆。靡く草木は自ら。君の威光におそはれて。みなかさゝぎのはね合せ。難

波の賤が一節も重ねかざる御代の春。壽き祝ふ舞の袖。あらお目出たや目出たやと歌ひ。奏てて舞納む。地光成興
 じ給ひ。面白き一節とてもの事に見え渡る。名所に擬へ蘆を刈りお目に懸けよ。地苦しうない大王の傍へ寄りて所
 望所望と望むも一物。舞手も一物荷物を持ちしわつばを呼出し。詞御所望にて候へば。蘆を刈り御目に懸け參らせう
 ずるにて候。ワキ折柄宜しく候。地いで蘆を刈らうよ。諸共に刈乾す蘆を演狹と。所かはれば品かはる。オクリ變
 らぬ。物は松の葉と。竹の根節のそれ其處をと。フシ走りかゝるを。地色嵯峨丸押照立塞つてどつこいどいと附廻
 す。此方へ來りていざ〱刈らう。いざ〱刈らう鎌の刃に。露のうきたつ我思。暫しは消えよ。フシ淡路島。時
 待つふねは播摩灘曾根にも松の千歳松。せくな向うは逆落し須磨の隙間もあるぞかし。鶴越に飛羽いて。思ひを君
 に明石湯。西の浦々山々も皆一同にかたはの。あしがま。地御目に懸けんと立廻り。入鹿を目懸けるわつばが面付。
 たゞ者ならずと嵯峨丸押照引挟んで切付くる。心得たりと鎌にてなぐり追立て。追立て切結ぶ。合圖違うて光成卿。
 待てよ〱と諸共に。オクリ追懸け〱奥に入り給ふ。地色其間に娘が身拵へ。鎌閃かして立向ひ。詞ヤア〱入鹿。お
 ことが吩咐け人柱に入れたる岩次が娘。鎌足公の情に依つて。お家の重寶片刃の鎌。神々の力をかつて親の敵討ち留
 める。地覺悟せよと飛びかゝる。ヤア。詞小ざかしと引摺み。地鎌奪ひ取り投付けるあつと一聲絶え入る娘。入鹿は
 鎌を押戴き。詞鎌足が重寶我が手に入るは天の時。心に懸る事無しと。油斷は大敵合圖の笛。地わつばと見えしは山
 上八王。嵯峨丸押照兩人が。首ひつ提げて立歸り光成主従兩方より。取巻き給ふ其内に一荷のあしは四方に別れ。内
 より鎌足源内左衛門手んで鎌の双先を揃へ。中にも鎌公大管上。詞古今に稀なる強敵。今日亡ぶる時節到來。急い
 で覺悟と呼ははり給へば。入鹿ちつとも仰天せず。騒ぐまい蠅蟲めら。一言尋ぬる仔細あり。ヤイ鎌足。我皇極を打
 殺し。今又汝が手にかゝらば。一天下に王たらん者ありや否や。ヤア要らざる問事。汝が殺せし帝は某が娘藤照姫。
 天皇は御安體。跡の氣遣ひ無用々々。イ、ヤ表裏いふな鎌足。家に傳はる片刃の鎌。女に與へし不覺者。天皇在世も

偽りく。愚や入鹿。女が心勵ます爲。草薙鎌を時の方便。眞の重寶。こりや爰にと。地振上げ給ふ双の光。コハリ御
殿に閃きさすかの入鹿。ナホスはつとばかりに眼を閉ぢ。思はずどつかと伏したるは。フシ神變奇特と云ひつべし。
地色すはやと人々くさり録。打付けく切付くる入鹿はむつくと起上り。打付ける録押取りく。我と我てに首にひつ
かけ天も突抜く大聲にて。詞我愛着の縁に引かれ。思はずも帝位を奪ひ。末代朝敵の名を残す。是即ち戀慕の絆。て
ん手にくさりを力に任せ。地引いて邪念を霽させよと。五體を堅める楠のたち木。えいく聲にて引落す。體は生拔
く深山の鐵石。首は敢なく觀念の。心につれて引落す。目出度く御世にかへり花直に。津の國長柄村。都の土地と末
長く榮え榮える難波瀉昔。語りを書残す。

